R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

—第14号—

《講　演》

スペインの民主化とスアレスの業績を考える
…… 碇　　順治（1）

《論　文》

アロンソ・オルティスの教育論に関する一考察
—その人文主義的要素について—
…… 加藤　さやか（17）

アルフォンシーナ・ストルニィにおける
ロマン主義的要素に関する一考察
—燕のモチーフを中心に—
…… 中村　多文子（33）

ヨーロッパ世界による他者表象に関する一考察
—大航海時代における巨人族表象について—
…… 長尾　直洋（49）

《書　評》

TABLADA, José Juan, *Obras completas VIII. En el país del sol.*
(Edición crítica, prólogo y notas de Jorge Ruedas de la Serna)
UNAM, México, 2006, 294 pp.
…… 太田　靖子（67）

古家久世著『ドン・キホーテへの誘い
「ドン・キホーテ」のおいしい読み方』
行路社 2006年 179 pp.
…… 三浦　知佐子（71）

2006年

京都イスパニア学研究会

Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto

スペインの民主化とスアレスの業績を考える

碇 順治

はじめに

スペインにあの内戦が勃発したのは今からちょうど70年前の1936年である。その内戦に勝利したFrancoが1975年11月20日に亡くなってから、2005年は30年目の節目の年であった。Franco没後のスペインは目を見張る発展を遂げた。いや、発展というよりもむしろ変化[1]と言うべきだろう。あらゆる面で大きな変化を遂げたのである。もはや「Francoのスペイン」の影はまったくないと言っても決して過言ではない。GDPの規模では世界のトップレベル[2]に達しており、EU25ヶ国の中でも上位を占める国である。このように、スペインが急激な成長を遂げたのは事実であり、また、それがEU加盟後に成し遂げられたものであることに異論を挟む人はいるまい。確かにそうだ。しかし、それらすべては、Felipe González率いる社労党[3]が、その思想も社会主義者としての体面をもかなぐり捨て、なりふり構わぬ右傾化を推進したお陰なのであろうか[4]。あるいは、その後96年に政権党となったJosé María Aznarの国民党が、Euroの第一陣に参加することを国家の至上目標として位置付ける[5]ことにより、国民は元より全政治政党をも巻き込んだ経済的挙国一致体制を築き上げたからなのだろうか。

確かにそれらのプロセスが成功裡に完了したからこそ現在のスペインがあることもまた決して間違った見方ではない。しかし、社労党の政策が可能であったのも、またその後の国民党が強気の政策に打って出ることができたのも、すべては、それ以前の、つまり、Francoから社労党政権へとつないだ「民主化への移行期(以降:Transición[6])」が存在したからであり、そのTransiciónが成功したことこそがスペインの現在の基盤となっており、ひいては、社労党や国民党の政治をも可能にしたことを忘れてはならない。

Francoは、現代のスペイン社会の中で、瞬く間に歴史上の人物と化してしまった[7]。それは、このFrancoの命日に彼を慕って集まる人が、年々、年を追う毎に減っている[8]ことをみても明白である。そのFrancoが創設したものの末期には単なる自身の支援団体と化していた「国民運動[9]」の最後の担当大臣こそがTransiciónを遂行した人物である。

1. 民主化までの概略 (Situación antes de la Transición)

スペインは世紀とさえ呼ぶのもおこがましいほどの短命であった黄金世紀から内戦に至るまでの約 2 世紀半、長い衰退期・低迷期を過ごした。無論、内戦もその中に含まれる。その衰退の時代には他の内戦もあったが、1936－39 ほどの規模ではなかった。それを制して約 40 年に亘る平和の時代を築き上げたのが Franco であったが、これは今回のテーマではない[10]。

内戦前に生まれ、Franco 時代に青春時代を過ごし、貧困生活から這い上がるために必死にもがいた若者は数数えきれずいただろう。野心家と目された Adolfo Suárez[11]もその内の一人であった。Franco 死去に伴い王政が復古し、Juan Carlos I 世国王が誕生し、王制第 1 期内閣の組閣に注目が集まったものの、最終的には Franco 政権最後の首相 Arias が続投することで、王制復古後の初代首相にもなった。そしてその内閣に「国民運動」担当大臣として入閣し、初めて国王の目に留まることになった[12]のが Suárez であった。

ここで一つ明確にしておかねばならないことがある。それは、Transición を推進したのは Suárez ではあるが、Franco 没後の民主化推進計画は国王自身のものであった。よって、国王はそのための首相として Arias が適任者でないことを百も承知の上で続投を許し、1976 年夏までの間に、民主化推進の重責を Suárez に託すことを決意した[13]。かくして、1976 年 7 月 3 日、Suárez 率いる王制第 2 期内閣が誕生した。

2. 民主化の開始と終了について (Punto del comienzo y el final de la Transición)

民主化の始点と終点については諸説がある。もっとも、始点については、「Franco 没時点か、Suárez の首相任命時点か」の二説しかあり得ない。前者はスペインのメディア等に多く見られ、一般化している説である。Franco が死ななければなにも始まらなかった、あるいは、Franco が死んだことで社会が動いたというのがその主な論調である。社会的区分法としては大変明快ではあるが、「Franco の死＝民主化」と考えるのではあまりにも短絡的過ぎる。Arias 王制第 1 期政権時代には政治的 Transición は全く実施されなかったからである。Franco 死後の社会が一挙に「開放ムード[14]」に向かったことは事実であるが、積極的かつ政治的な方向付けがなされなければ何も始まらない。もっとも、後述する「政治改革法案」が成立した時点を Transición の始まりだとすることも十分に可能である。つまり、たとえ Suárez が民主化

を推進するために国王に任命され、その後、同法案を Franco 国会で承認させ、国民投票にかけたとしても、これを国民が拒否する、あるいは、それ以前の国会承認さえ得られなかったとすれば、すべては振り出しに戻っていたであろうし、またその後の民主化は困難を極めたであろうことは想像に難くないからである。ともあれ、これから述べる民主化終了時点同様、開始時点についても、あくまでも結果論を基盤としてのみ論じることができることも念頭に置かねばならない。

さて、終点を定めるのは更に困難な作業である。78 年の民主憲法発布／憲法後の 79 年の民主選挙終了／81 年の Suárez 首相辞任／82 年の社労党政権発足／86 年の EC 加盟等々の見解があり、一致していない。民主化推進者である Suárez 自身の見解[15]はこうである。始点を彼自身の首相就任時点とし、終点を憲法発布にあるとしている。因みに、Suárez は 78 年憲法公布後、民主化終了を理由に国会を解散し、民主憲法に基づく総選挙に打って出ている。その時点で自ら解散選挙に踏み切らなければ彼の任期はまだ 2 年少々残っていたからである。もっとも、Suárez のこの解散総選挙には少なからず裏があった[16]。

そこで、Juan J. Linz と Alfred Stepan がその著書[17]で提示している「民主主義への移行の完了[18]」に沿って始点と終点を考えてみたい。詳細な考察[19]は誌面の都合上ここでは省くが、Linz たちの定義は 4 番目の条件として三権分立に言及していることから、この段階が「民主憲法が成立」と考えることができるが、5 番目の段階にまでいくと、Franco 没後 8 年もの歳月が経過した 1983 年頃が Transición の終焉となる可能性もあり、それでは O'Donnell と Schmitter が定義する「移行期間」[20]がいかにも長すぎる。むしろ、この最後の条件は、終わりを示すのではなく、著書名にも使用されている「Consolidation＝確定・定着」の段階だと理解すべきで、いわゆる通常の民主主義社会のあるべき姿そのものが提示されていると考えるべきである。結果論ではあるが、民主化の終了が条件 4 であるとするならば、スペインの Transición は「政治改革法案の成立(1976 年 12 月)と共に始まり、民主憲法が公布されたこと(1978 年 12 月)を持って終了した」ことになろう。であるとするならば、前述のようにその真意はさておき、民主憲法発布をもって民主化は終了したことを、あの急激に変化する時代の流れの中で Suárez 自身が明確に認識していたことになり、Suárez の政治家としての能力と人物像を描く上で大きなポイントの一つとなろう。結論として、Suárez が考えた期間

(76年7月-78年12月)とほぼ合致する上に、約2年という期間もまた移行期間としても実に理想的であったことがあらためて認識しうる。

3. 「法から法」と民主化 ("De la Ley a la Ley" y su Transición)

Suárez が民主化の立役者であったとするならば、Torcuato Fernández-Miranda[21](以後: Tato)は、Franco時代の法体制に則り、いわゆる正規ルート、つまり法律(しかし、あくまでFranco時代の法)を駆使し、独裁体制を民主主義の政治体制に移行させるためのシナリオを創り上げた人物である。そして、この「法から法」と呼ばれる枠組みこそが、Franco後のスペインで行われたTransiciónの根幹をなすものであり、Linzが言うところの「合法的革命(中略)、ないしドイツ人が違憲の憲法改正とよぶもの[22](傍点は原訳書)」なのである。

「法から法」は単なる法改正ではない。数の論理だけで憲法九条を拡大解釈しようとするような小手先だけの姑息な手法ではない。Francoが約40年をかけて築き上げた法の枠組みを根底から覆し、国家の政体を完全に別物にすり替えてしまうためにTatoが編み出した究極の方法である。Tatoは少なくとも約5年もの歳月[23]をかけてこの構想を温め続けていた。「法から法」は政治改革法案[24](Proyecto de la Ley para la Reforma Política)として具現化され、Franco国会が自らの埋葬を承認すると同時に、Francoの Leyes Fundamentales(基本七法)[25]そのものの事実上の廃止をも容認するという実にマキアベリ的かつきわめて並はずれた方法でFrancoの法体制からの脱出を図ったのである。

政治改革法案は、1976年12月15日、Suárezが首相に任命されて僅か半年で国民投票にかけられ、投票率77%、賛成94%という圧倒的支持を得て成立した。国会で承認され、国民に問われた同法案の形態は法としては実に簡潔で短いものであったが、そこにはTato自身が「政治改革基本法[26]」と名付けた原文の構想が凝縮されていた。同原文はSuárez首相就任約1ヶ月後の8月23日にTatoからSuárezに手渡されていた。Suárezは同原文を検討し、翌9月には、これとほぼ同様のものを法案として内閣閣議にかけ、承認を取り付けた後に国会に提出したわけである。Tatoはその前文の冒頭から、「民主主義は即興で演出できるものではなく、スペイン国民の努力と尽力の賜でなければならない。如何にも気高そうな幻想的かつ抽象的創造や、極限的行動、あるいはpronunciamientoや専制的手法、教義にまで高められたセ

クト主義などは、民主主義に我々を導かないばかりか、これを破壊するものであることは、カディス議会以降の我国の過酷な歴史が物語っている(抄訳著者)」と述べ、問題は決してFrancoの独裁時代だけのものではなく、もっと長く深い背景があるとの認識に基づき、その後の章で民主化への移行のあるべき理想の姿を目指してその政治改革法案の骨組みを具体的な法律文として展開している。

Transición の期間が 1976－78 年の約 2 年間であったとするならば、Francoが没した翌 1976 年は、このように、彼と彼の体制に訣別を告げるための様々な準備[27]と、その決意を固める年となった。スペインは新たな社会の枠組みを構築するための準備段階に突入したのである。成立した政治改革法の最後の経過措置には、二院制の議会民主主義国家を形成するための普通選挙の実施も謳われていた。

Transiciónの中間の年である 1977 年は、民主化の山場の年、最大の変化、最大の変革の年となった。Franco体制のすべてが大きな音を立てて崩れていく一方、その体制を守ろうとする側(体制側)と、崩そうという側(反体制側)の両者の激しいぶつかり合いの中から、結果的には前者が完全に後退することで社会全体が大きく動いた年であった。もっとも、その時点での勝者(主導権を握っていたの意)は、社労党を筆頭とする九人会[28]に代表された反体制側ではなく、制度上は体制側にいたものの、考え方(思想的とは言い難いので)としてはあくまでもその中間に位置していた体制内から民主化を推進していたSuárez政府であった。反体制側は、選挙キャンペーンに入る 77 年 3 月頃までは、終始一貫して「体制解組[29]」を叫び続けていたが、その選挙が現実のものとなるにつれ、同訴えも、また、九人会そのものも自然消滅するに至った。前述のように、Tatoが意図していた「法から法」こそが本当の意味での「体制解組」であったことにその時は誰も気付いてはいなかった。

この 77 年の様々な出来事については次章に委ねるとして、78 年は、憲法の年、Transición最終仕上げの年となった。各自治州の臨時政府が次々と発足し[30]、年末の 12 月 6 日には新憲法が国民投票に附され、投票率 67%、賛成 87.9%の圧倒的な支持をもって成立し、年も押し迫った 29 日に公布された。その直後、Suárezは解散前倒し総選挙を発表した。理由は、前述の通り、「Transiciónは終了した」と彼が判断したからであった。

4. Suárez の業績 (Obra de Suárez)

4.1. 1977 の動向

1977 年は実に目まぐるしい年となった。政治改革法案が可決された同じ 76 年 12 月に起こった極左テログループ GRAPO[31]による体制側の要人の誘拐事件[32]や、内戦終結後亡命を続けていたはずの共産党書記長 Santiago Carrillo が政府に対し挑戦状を叩き付けるかのように突如として首都 Madrid に現れ、記者会見を開き、その後逮捕されるも、Suárez 政府は彼の国内残留を認め釈放せざるを得なかったのである[33]。

こうした反体制側のあがきは、77 年 1 月に起こった極左の連鎖事件「暗黒の一週間[34]」としてその攻防戦の山場を迎えることになった。当時、体制側、反体制側を問わず、良識ある一般市民の間で最も恐れられていたのは、一触即発の何らかの事態が起こり、再び内戦に突入することであった。「暗黒の一週間」がそうした可能性を含んでいなかったとはいえない。したがって、厳密には無血の民主化ではなかったものの、体制、反体制両陣営は冷静にこれに対処した。内戦という痛ましい歴史を再び繰り返さないことは両陣営の暗黙の了解であったことが証明されたのである。

4.2. 共産党の合法化と総選挙 (Legalización del PCE y EE.GG.)

首相に任命された時点では、国王の意向により Tato が準備した Transición 推進の演じ手となるのが Suárez の役割であったはずだが、Franco 国会で政治改革法案を通過させ、さらに国民の大きな支持を取り付けた自信を背景に、Suárez は次第に独り立ちしていく[35]。特に、予想もしていなかった Carrillo の表舞台への登場は、Suárez にとって大きな転機となったといえよう。事実、「暗黒の一週間」の最後の大事件となった「アトーチャ事件[36]」後の Carrillo をはじめとする共産党の沈着冷静なる対応を目の当たりにした Suárez は、この時点、つまり、まだ Franco が亡くなって 1 年強の、総選挙実施直前の時点で、共産党をも含んだ Transición の可能性を直感し、独自の判断で Carrillo との密会(同年 2 月)に踏み切り、4 月には共産党を正式な政治政党として認可したのである[37]。

Franco の死の記憶がまだ新しい時期に、共産党を参加させることに対し軍部が反発しないはずはなかった。ましてや、その数日前の 4 月 1 日(内戦戦勝記念日)には、Franco の最大の関心事であった労働組合[38]の合法化が執行されていた上に、Franco 時代の唯一の政党であった「国民運動」も解体の憂き

目にあっていた。そこに、内戦で最もFranco軍を苦しめた共産党をSuárezが独断で認可してしまったのである。共産党合法化については、Suárezに近しい数名の大臣にしか事前に知らされておらず、海軍大臣は当然のように辞任した。

ともあれ、通常の民主社会であれば当然容認される政治思想団体のすべてを、Franco没後初となる立憲議会選挙に参加させたことは、非の打ち所のない民主的な総選挙をスペインがやってのけたということで、これは実に大きな意義を持つ。同時に、この共産党合法化の事実は、反体制側、特に、内戦終結以降は外国に亡命していた多くの共和主義者たちが、Suárez政府に信頼感を持ち出した大きな要因になったことも忘れてはならない。むろん、それよりも以前の3月に実施された第2回目の恩赦は、ほとんどすべての政治思想犯の釈放や、そうした政治亡命者たちの亡命理由も消滅させてはいたが、実際に亡命者が雪崩を打ってスペインの土を踏んだのは、共産党合法化以降の5月に入ってからであった。

1977年6月15日に実施された総選挙は、1936年2月16日から数えること41年振りであったにもかかわらず、ほぼ混乱もなく平穏に実施され、Suárez率いる民主中道連合(以後:UCD)が過半数割れではあったものの辛くも政権与党の座を獲得し、スペインに二院制議会制度が発足したのである。これを受け、6日後の6月21日、亡命中の第二共和制政府は、パリにおいてその組織の解散を宣言した。これ自体はシンボリックな行為でしかなかったが、これは、内戦勃発と同時に二分し、さらに、その後Franco軍が勝利したことによってその分断が決定的なものとなり、約40年間にわたって存続した「二つのスペイン(Las dos Españas)」が一つになった(あるいは、政治的二分、又は二つのスペイン政府の解消)瞬間であったという点において、歴史的に極めて重要なポイントであるといえよう。

4.3. 自治州問題 (Autonomía)

翌7月には、民主選挙後初のSuárez内閣が発足し、山積になっていた問題に取り組み始めた。その中にはFranco時代からの懸案事項であったEC加盟申請もあった。1年前のSuárezの首相任命時には、見向きもしなかったECが、今回はスペインの加盟申請を正式に受理したのである。

先の選挙が立憲議会選挙であったことから、当然のことながら、8月早々には憲法起草委員会も発足した。そして9月には、カタルーニャとバスクの

両地方に自治州臨時政府が発足した。この時点でいわゆる歴史的自治州[39]の臨時政府を発足した事実は大きい。これは、とりもなおさず、Suárez の首相任命とほぼ同時にこれに向けてのメカニズムが機能し始めていたことを証明しているからである。事実 Suárez は、首相に任命された翌月の 76 年 8 月にはこうした地方の代表者たちを首相官邸に迎え入れ、すでに意見交換をしていた。つまり、Suárez は、首相に任命された時点で、この歴史的問題に関しても、何をすべきか、あるいは、どう対処すべきかをすでに承知していたのである。当問題は、第二共和制政府が残した歴史的遺恨を晴らすのか否かの感情論のみならず、国家の枠組みそのものや、国と地方との力関係等々を大きく左右する重大な問題でもあった。事実、21 世紀の現在も、本自治州問題は様々な問題を提議し続けている。いずれにしても、新民主憲法の草案はおろか、その基ともなるべき政治改革法案さえ存在しなかった 1976 年 8 月の段階において、Suárez がこの問題について、少なくとも、第二共和制時代と Franco 時代との間に出来た大きな溝を埋めるべく歴史的な諸地方の代表と接触を持ちつつ、その準備を進めていたという事実は、実に驚くべきことである。その時点で Suárez は Tato から政治改革法案のたたき台さえもまだ受け取っていなかったことを鑑みれば、これは重要なポイントである。当初 Suárez 政府は歴史的三自治州の認可のみにとどめるつもりであった[40]が、この自治州問題を無視してスペインに民主主義体制を確立させることは極めて困難であったことも事実である。特に、第二共和制時代に成立したカタルーニャとバスクの両自治政府は、Franco 時代の約 40 年間、亡命政府として苦汁を飲まされていただけでなく、両地方の住民もまた、各言語の使用禁止を始めとする抑圧を Franco 政府から少なからず受け、40 年間苦しみ続けていたことも合わせ考えるならば、自治州に対して Suárez が採った政策は間違っていなかっただけでなく、彼のそうした極めて早い段階での対応と準備があったことが Transición をよりスムーズに、またそれに伴う混乱を最小限にとどめさせたと判断する材料になろう。残念ながら、筆者は、Suárez が 76 年夏時点でなぜこの問題を積極的に推進したのかの真意を突き止めるには至っていない。ともあれ、この自治州問題は、バスクのテロ問題[41]に代表されるように、その他にも、言語問題、民族問題、国民あるいは住民の国籍意識の問題等々、まだまだ諸問題が山積されており、今後も継続的あるいは永続的に収拾の極めて困難な問題として残ると考えられる。つまり、Suárez の自治州問題に対する政策は、彼の多くの業績の中でも、最も高く評価されるべ

きであると同時に、スペインという国家的立場からこの問題を見た場合には、彼の最大の汚点、あるいは、功罪だといえよう。

4.4. モンクロア協定[42] (Pactos de Moncloa)

以上が Suárez の業績のすべてではない。ここに挙げたのはほんの一部のみである。すべてを網羅することは紙面の関係もあり極めて不可能であるが、最後にもう一点だけ挙げるとするならば、それはやはり「モンクロア協定(Pacto de Moncloa)」であろう。同名称は、協定が署名された首相官邸のある宮殿[43]の名称からこう名付けられた。モンクロア協定は、当初は経済協定だけが締結されるはずであった。Suárez は、73 年のオイルショックがスペイン経済に与えていた大きな影響に言及し、「その困窮した状況には憂慮しているものの、まずは民主主義国家を確立させることが優先課題である。よって、経済問題はその決着をまず付けた後で対処する」ことを、76 年夏の首相就任時点でのテレビメッセージを通し国民に理解を求めていた。したがって、その経済政策は絶対に中途半端なものでは通用しなかったのである。そこで彼が打ち出したのが、全政治政党を巻き込んだ「経済協定[44]」であった。

Suárez はこの協定を実現させるにあたり、それまで頑なに入閣を拒んでいた Fuentes Quintana を経済担当大臣兼第二副首相に就任させていた。Quintana はスペインでは最高峰の経済学者として著名な人物である。つまり、同経済協定の中身はすべて彼の指導の基に作成され、当時としては、これ以上は望めない(野党側には別の視点はあったが)経済政策と見るべきである。もっとも、実は、この経済協定の中身云々は、Suárez の業績とはほとんど無関係と言っても過言ではない。つまり、その中身や結果は別として、Suárez はこの協定に加え、各政治政党との間でさらにもう一つの協定を結ぶことに成功していたからである。それは他ならぬ「法政協定[45]」であった。

同協定を端的に説明するならば、「憲法が制定されるまでの国家秩序を守るための臨時憲法に相当するもの」であった。実際のところ、民主主義の精神に則り立憲議会選挙を行った後でもあり、国を挙げて民主化を進める一方で、当時の現行法であった Franco 時代の法律を適応させるわけにはいかなかったのである。その論拠は確かに一理も二理もある。しかし、これは経済協定を利用したスアレスの苦肉の策であると同時に巧妙で一大快挙とも言えた。しかし、これは換言すれば、実に狡猾な政策でもあった。少なくとも国民連合(Alianza Popular)の Fraga 党首はそう主張し、署名を拒んだ。

モンクロア協定は一種の挙国一致策である。むろん、Suárezが首相に任命された時点での彼の評価は低かったこと等から、その時点で同様の協定を反体制側と締結するなどと言うことはまず考えられなかったのも事実ではあるものの、何故もっと早い段階でこうした挙国一致体制を築こうとしなかったのかという疑問も残る。しかしながら、総選挙が終わり、新政治体制が確立し、新たな政治勢力による新しい構図が出来上がり、与野党も明確になった後でこれを実現させたことこそが、Suárezの偉大さだともいえるのである。さらに、政治上注目に値するのは、各地方(後の自治州設立を念頭に)にもそのつど適応させる旨をわざわざ協定の中で謳っていたことも忘れてはならない。まるで第二共和制時代を意識したかのような「連合政権」が形成されたのである。反体制側が執拗に主張していたRuptura Democráticaが、Franco死去の2年後、初の総選挙の後に別の形で芽を吹いたかのようであった。

おわりに

Suárezの業績の中で最も肯定的な業績を三つだけ挙げるというのはなかなか難しくも悩ましい選択であった。しかし、業績のみを羅列しても意味がない。それらについて個々に考察するとすれば膨大なものになってしまっただろう。

Transiciónのプロセスに共産党を参加させることですべての物事が旨く運び、完璧な民主化を実現することができると直感したSuárezの政治家としての動物的なまでの「感覚・嗅覚」は大いに評価されよう。彼を様々な面で支えた国王やTatoの意見を振り切ってCarrilloと会い、当時の米国務長官キッシンジャーが時期尚早と判断し、とりあえずは共産党抜きの民主化過程を容認していたにもかかわらず、Suárezは真っ向からの直球勝負に出たわけである。新憲法の草案の立案さえまだ始まってもいなかった時点で、ほぼ完璧と評価しうる100%の民主主義の理念に則った立憲議会選挙を実施したのである。言うなれば、理想を実現したのである。この理想の追求が平和裡に、またあまりにも当然のことのように成功したせいだろうか、あるいは、その後のFelipe Gonzálezの社労党政権が華のある政治をやってのけたせいだろうか。その影に隠れ、石を一つ一つ積み重ねるような地道なSuárezの政治が評価されず、我国での研究もあまり進んでいないことは残念である。

共産党合法化に関する最終決断は確かにSuárezが首相としての責任で下した決断であった。しかし、その裏には、実に堅実かつ緻密で複雑な法的手

続きが事前に踏まれていた[46]。その法的メカニズムの基本的なものの一つが総選挙をにらんだ政治結社法の改正(同年 2 月)であったが、実は、同改正もしかりで、同法は、その 7 ヶ月前にも一度改正されていたのだ。それは、76 年 6 月、Arias 政権も末期のことであった。それまでの政治結社法の大筋としては、69 年の国民運動内でのささやかな改革があり、10 結社がこの法律に則り設立されたものの、半ば党内派閥的なものでしかなかった。しかし、76 年 6 月に行われた民主主義に則った複数政党制への改正により全 19 政治政党が誕生していた[47]。そして何よりも驚くべきは、この改正案を Franco 議会に提出した張本人が、当時、国民運動担当大臣の座にあった Suárez 自身であったのだ。さらに驚くべきは、それら 19 政党の内、7 政党が民族主義に根ざした地方政党であった。Suárez はすでにこの時点で地方分権の必要性を体現していたのでる。また別の視点から見れば、今から 30 年前に Suárez は世界が地方分権化に向けて進むであろうことも察知していたのかも知れない。彼は、モンクロア協定にもその文言を付け加えていた。

しかし、Suárez は理想主義者などでは決してない。当時の評判通り、彼は確かに野心家に属する種の人物である。前述の政治結社法の改正に先駆け、彼は、Franco 議会内にあった特別待遇を受けていた 40 人の búnquer たちのグループ[48]に空席が出来た際、彼の対抗者が Franco の一人娘の婿である Martínez-Bordiú であったにもかかわらず、負け戦を承知の上で立候補し、Franco の娘婿をうち負かし、特権階級を有した一握りになった。そしてこのことが後に国王から首相に任じられた折りに、体制側を欺くのに大いに役に立ったのである。もっとも、その時点で Suárez 自身、次期首相に任命されるか否かの確証を持っていたわけではないことから、そのことを想定しての行動であったとは判断し難い。もっとも、当時の国王の胸中では既に首相候補が概ね決まっていた。そして、Suárez に対してこれを匂わすような発言もあったことも事実[49]ではある。

Franco の忠実な僕であった Herrero Tejedor に見い出され、彼について行くことで Franco 体制内の階段を掛け上がり、その後 Carrero に見い出され、Franco の支持団体であった国民運動のトップにまで上り詰め、最後には、Franco 議会の中枢にまで入り込んだ Adolfo Suárez は、生粋の Franco 主義者だったのであろうか？政治的かつ思想的には、極右の全体主義者であったのだろうか？そして最終的には、民主化推進の演じ手として、また、国王よりも若く、Tato のシナリオにおいて理想的なイエスマンとしての役目を果た

すだけの人物だったのだろうか。すべては否であろう。Adolfo Suárez なる人物は、あの Franco がそうであったように、政治的思想などは持ち合わせてはいなかった。しかし、野心家で、人並みはずれた鋭い洞察力と正確な状況判断能力を持ち合わせていた。同時に、家庭を大事にし妻や子をこよなく愛するごく一般的な人物でもあった。

最後に「人間Adolfo Suárez」に言及したのには理由がある。スペインのTransiciónを実現させたSuárezは現在、末期のアルツハイマー症で、自分の過去さえも記憶に止めず、自分自身が誰なのかももはや分からない状態」にいるからである。このことは、近い将来には、父と同じ要職に到達する可能性を大いに秘めていた元国民党議員の長男が、2005年6月1日、スペイン国営テレビ局の番組“Las Cerezas”で明かした。直接の原因は妻と長女をほぼ同時に亡くしたことであろうと言われている。1991年に政界から引退していたSuárezは、彼の弁護士事務所で彼同様に活躍していた長女Mariamに1993年癌が発覚したことで完全に政界から去った。2001年には最愛の妻Amparoが長女と同じ癌で死去し、その3年後の2004年には長女も亡くなった。Amparo婦人が亡くなった頃からSuárezの精神状態はおかしくなりはじめていたという。

---

1 スペイン語では「cambio」が使用され、日本語では通常「変革」と訳されるが、今回はあえて「変化」を使用した。

2 世界銀行 2004 年 9 月発表の 2003 年データではスペインの GDP(836,100 百万ドル)は中国に次いで世界第 8 位。

3 正式党名は Partido Socialista Obrero Español。よって「スペイン社会主義労働者党」となろう。

4 詳細は拙著『スペイン 静かなる革命』(彩流社, 1990) の pp.264-272 を参照。

5 1992 年のマーストリヒト条約で定められた 5 つの経済収斂条件(インフレ・財政赤字・政府債務・為替レート・長期金利)を満たし、通貨統合の第 1 陣に参加できなければ、スペインの経済的・政治的信頼が揺らぎ、外国直接投資にその多くを依存していたスペインは、大きな後退を余儀なくされるというのが国内でもまた国際的にも一貫した見方であった。

6 スペインの Transición は、Transición de la dictadura a la democracia en España であるが、80 年代初頭あるいは 70 年代後半にはすでに Transición española、あるいは、Transición のみの略式表現・表記が使用されていた。

7 現人口の 36.5%がフランコ没以降の生まれであることに加え、2005 年 11 月 19 日(命日の前日)に El Mundo 紙が報じた Sigma Dos の調査では、「フランコに対し悪いイメージを持っている」が 51.2%で 5 年前の 25 周年の時点よりも 13%ポイント低下した。一方この調査は、実際にフランコを知らない年齢層ほど悪いイメージを持っている(65 歳以上=32%, 45～65 歳=50%, 30～44 歳=54%, 18～29 歳=66.3%)としている。これは、まず一方では、実体験の印象ではなく、あくまでも「独裁者としてのレッテル」から来る歴史的かつ表面的評価であるとみるのが正しかろう。同時に、実際にフランコと共に生きたスペイン人にとっては、いわゆる「歴史上の人物として客観的に評価

すれば、決して悪くはなかった」という評価であると考えられる。

8 30 年の節目の年となった 2005 年には、Franco が葬られている「Valle de los Caídos」の追悼ミサには約 1500 人(Periodista Digital 報)が、そして、Madrid の Plaza de Oriente には約 8000 人(El Mundo 紙報)が集会を行ったのみである。

9 「国民運動(Movimiento Nacional)」は内戦中の 1937 年に Franco が認可(統一)した唯一の政治思想団体だが、同機関を行政の枠内で機能させることで Franco 体制を支える役目を担った。

10 スペインの 20 世紀の大きな流れは次の通り。1909-1927 モロッコ侵攻(1914-1918 第一次世界大戦):1923-1930 Primo de Rivera 独裁政権:1931-1939 第二共和制時代(王国消滅):1936-1939 内戦 (1939-1945 第二次世界大戦):1938 Franco 政権発足:1946 国連スペイン排斥決議:1947 国家元首継承法公布で王国宣言, Franco 終身国家元首に:1948 現国王 10 歳でスイスから入国:1950 国連のスペイン排斥決議解除:1955 国連に復帰:1957 テクノクラート時代始まる:1969 現国王の王位継承者宣誓:1973 Franco が Carrero Blanco を首相に:1973 Carrero 首相 ETA に暗殺さる:1975 Franco 死去, 王政復古:1976 国王 Suárez を首相に任命:1976 政治改革法案国民投票で承認:1977 民主初総選挙, 二院制国会発足, EC 加盟準備開始, 自治州臨時政府設置, Moncloa 協定:1978 民主憲法発布:1979 民主憲法後初総選挙(第 2 回総選挙), 第 1 回地方選:1981 Suárez 首相辞任, 23-F クーデター:1982 NATO 加盟, 第 3 回総選挙で社労党政権樹立:1986 EC 加盟:1992 スペイン・イヤー(オリンピック, 万博等), 欧州市場統合:1996 国民党政権誕生:2002 Euro の導入:2003 Aznar 首相が米のイラク攻撃支持:2004 11-M, 社労党政権返咲き。

11 Adolfo Suárez González 略歴。 Ávila 県 Cebreros 村に 1932 年 9 月 25 日生。長男:Salamanca 大学法学部卒(1953):Complutense 大(修士・博士課程終了):兵役終了後地元で進学塾開設:Herrero Tejedor が Ávila 県知事就任で政府の出張所に就職:弁護士を目指して Madrid へ(多難時代):1958 Herrero の推薦で「国民運動」に就職:1961 Amparo Illana と結婚:1962 Herrero 国民運動副議長就任後に副議長局課長に就任:1964 RTVE 番組編成局長, 第 1 放送局長等:1967 国政選挙に Ávila 県から立候補し当選:1968 Segovia 県知事兼同県「国民運動」代表に就任:1969 RTVE 会長に就任:1971 国政選挙に Ávila 県から立候補し当選:1973 Entursa(公営観光企業)社長に就任:1975 Herrero 国民運動議長就任で副議長に就任, 民衆同盟(UDPE)党首に, Herrero 交通事故で死去し副議長職を辞任, 第 1 期王政 Arias 内閣国民運動担当大臣に:1976 首相に任命:1977 民主総選挙後初の国民選出首相に:1979 民主憲法発布後初の首相に就任:1981 首相辞任, 公爵の爵位授与:1982 UCD 脱党し社会民主中道党(CDS)結党し党首に:1989 国際自由党連盟会長に:1991 政界引退(59 才):1996 Premio Príncipe de Asturias de la Concordancia 受賞。

12 註 4 の pp.73-76 参照。

13 註 4 の pp.79-88 参照。

14 Franco の死＝Libertad(=自由)の構図は、長年の抑圧時代の帰結として、Libertad を Libertinaje(放蕩・無法)、つまり自由を履き違える状況が同時進行した。

15 Suárez, Adolfo: "Apuntes sobre la transición política", *Cambio 16*, 16-01-1991.

16 註 4 の pp.228-230 および拙著『現代スペインの歴史』(彩流社, 2005) の pp.160-165 を参照。

17 Linz, Juan J & Stepan, Alfred: *Problems of Democratic Transition and Consolidation*, Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1996 (『民主化の理論 民主主義への移行と定着の課題』荒井＋五十嵐＋上田訳, 一藝社, 2005).

18 1)選挙による政府の樹立を目的とした十分な政治手順についての合意は得られたか? 2)自由な国民の直接選挙の結果誕生した政府が政権に就いたか? 3)同政府は新たな政治体制を構築するだけの権限を有したか? 4)新たなる民主政治から誕生した内閣、議会、そして、司法の各権力は、他の制度と法的に競合することはないか? 5)その権力は基本的自由を尊重し行動しているか?

19 詳細は拙著『現代スペインの歴史』(彩流社, 2005) pp.225-241 を参照。
20 シュミッター／オドンネル『民主化の比較政治学』(未来社, 1986) の p.34 参照。
21 法学博士でもある Tato は、Carrero 内閣で副首相に就任し、Carrero が暗殺され Arias に引き継がれるまで首相代理を務めている。第 1 期王制内閣では、一院制議会議長に就任。1977 年 Franco 後初の総選挙の直前に事実上政界引退。スペインの最高の勲章であり通常は他国の国家元首(例：我国の天皇)のみがその授与対象となっている「金羊毛勲章」を受賞。
22 J.J.リンス『民主体制の崩壊』(岩波現代選書, 1982) の p.213 参照。
23 現国王が Franco の継承者として正式に Franco 国会で指名承認された 1969 年頃、当時の皇太子に相談をされ、その回答として出した答えが起源。
24 政治改革法の全文の抄訳は註 19 の pp.265-269 を参照。
25 フランコ時代にはいわゆる憲法が存在せず、労働憲章(1938)：国会設置法(1942)：国民憲章(1945)：国民投票法(1945)：国家元首継承法(1947)：国民運動原則法(1958)：国家組織法(1967)が体制の基本法として位置づけられていた。
26 Fdez. Miranda, Pilar y Alfonso：*Lo que el Rey me ha pedido*, Plaza & Janés, 1995 の pp.365-367。
27 恩赦：Suárez 自身による反体制側との公式、非公式を含めた対話：Franco の軍隊を説得し協力を要請すること：1964 年設立の政治犯専門裁判所(公安裁判所＝TOP)の廃止等々。
28 反体制側の政治団体等の 9 名による代表者会議で、政府と国民のパイプ役なる位置付けで機能するはずであった。詳細は註 4 の pp.132-133 を参照。
29 "Ruptura Democrática"は Franco 時代に創造された制度を完全に葬り去り、民主主義に則った新しい枠組みを作る、つまり「無からの出発」以外には、内戦で生じた「Las dos Españas が一つのスペインに戻ることは決してない」とする主張。なお、これに対応する日本語として、「体制」を一端「解」体し新たなる制度を「組」み直すという著者自身の造語をあてた。
30 詳細は註 4 の pp.187-228 を参照。
31 Grupos de Resistencia Antifascista de Primero de Octubre (反ファッシスト 10 月 1 日革命集団)。
32 註 4 の pp.136-139 を参照。
33 厳密に Franco 体制に沿って政治を行えば、思想犯あるいは非合法政治結社への所属の廉で釈放されるようなことはなかったが、ともあれ、Carrillo の「自主的帰国」等、Carrillo についての詳細は註 4 の pp.144-152 を参照。
34 「暗黒の一週間」(Siete días Negros de enero)の詳細は註 4 の pp.136-142 を参照。
35 Bardavío, Joaquín: *Sábado Santo Rojo*, Madrid, Ediciones Uve, 1980, p.150 を参照。
36 「アトーチャ事件」(La matanza de Atocha)は、共産党系労務弁護士 5 名が極右の凶弾に倒れるという悲惨な事件だが、詳細は註 4 の pp.140-142 を参照。
37 共産党の合法化に関しては、註 35 が詳細に記述しているが、日本語の場合は、註 4 の pp.152-156 を参照。
38 Franco 時代は御用組合の「Sindicato Vertical(垂直組合)」のみが唯一の労働組合という名の団体であった。
39 現 17 自治州の内、歴史的自治州と呼ばれる地域は 3 地方ある。その内のカタルーニャとバスクは、第二共和制時代に自治権を一度獲得していたが、Franco の内戦勝利で同権利は剥奪された。残るガリシア地方は、バスクより少々遅れ、1936 年 6 月に地方人民投票が実施され承認されてはいたものの、その後、内戦が勃発したことで、第二共和制時代には国会での承認には至らず、自治権を有したことはなかったが、人民投票を終了していることや、異民族の地方であるなどの特殊事情から、歴史的自治州に含まれている。
40 Clavero Arévalo, Manuel: *España, desde el centralismo a las autonomías*,

Planeta, 1983 の pp.32-35 参照。

41 テロ集団 ETA(バスク祖国と自由)についての詳細は、註 4 の pp.197-228 参照。

42 詳細は註 19 の pp.150-155 を参照。および、Presidencia del Gobierno: *Los Pactos de la Moncloa*, BOE, 1978 を参照。

43 Franco 時代は国家元首と首相を Franco が兼任していたこともあり首相官邸の設置は必要なかった。1973 年に Carrero が首相に就任し、Madrid の Colón 広場の傍の Castellana 大通りに面した場所に設置されたものの、Suárez 首相就任後は、警備上の問題やスペースの問題、仕事量、そして国王の住む Zarzuela 宮殿により近い場所等が考慮され、Complutense 大学に隣接する現在の同宮殿に移転した。

44 正式名称訳は「健全財政および経済改革計画に関する協定」で、全与野党(9 政党)が署名した。中身の概略は、年度予算、社会保障、物価対策、教育、エネルギー、公社(INI)、農・漁業や失業保険等に至るほぼすべての経済分野を網羅しており、さらに、税制改革(Franco 時代は間接税のウエイトが大幅に直接税を上回るねじれ現象が慢性化していたことで、公平な徴税制度の改革が不可欠であった)も盛り込まれた。

45 正式名称訳は「法制に関する行動計画遂行についての協定」で、同協定には国民連合を除く 8 政党が署名した。報道の自由、国家機密問題、国営放送、集会、政治結社、刑法、刑事訴訟法、軍事法、公安および治安組織の再編成等々から構成されていた。

46 註 35 を参照。

47 数の上では確かに 19 政党が同法の改正により認可されたが、あくまでも Franco の基本法に則った政党である。Martín Merchán, Diego : *Partidos Políticos. Regulación Legal*, BOE, 1981 の pp.99-101 を参照。

48 Franco 議会内の国家諮問会議のメンバーで「Cuarenta de Ayete」と称され、75 歳の定年が来るまでその座を奪われることはなかった。

49 Bardavío, Joaquín: *El dilema*, Madrid, Strips Editores, 1978 の pp.116-117 を参照。

アロンソ・オルティスの教育論に関する一考察
ーその人文主義的要素についてー

加藤　さやか

はじめに

『カトリック両王の息子フアン王子の教育についての対話』[1]（以下『対話』と略す。）の中で，著者アロンソ・オルティスは，人間が善になるための必須要素として，本性 Naturaleza，習慣 Costumbre そして理 Disciplina[2]の三つを挙げている。一つ目の人間の本性については，オルティスの人間論として我々は既に考察を行ったが，そこで見出したオルティスの結論は，残りの二要素にあたる教育についての議論への導入でもあった。

オルティスはその人間論の最終段階で，アリストテレスの『ニコマコス倫理学』に基づき，人間の魂の機能及び理性の具わり方について述べた後，理性的な部分の所有ゆえに人は完成可能な存在 perfectible であると結論付けた。しかしその一方で，人間の本性の限界をも認め，人間が善なる人間へ

---

[1]原書は，*Liber de educatione Iohannis serenissimi principis et primogeniti regum potentissimorum Castellae Aragoni et Siciliae, Fernandi et Helisabet inclyta prosapia coniugum clarissimorum* を題名とする。同書は，本誌前号掲載の拙稿より引き続く研究対象であるため，同書の概要及び著者 Alonso Ortiz の周辺についての記述は本稿では省略した。Cf.拙稿「アロンソ・オルティスの『カトリック両王の息子フアン王子の教育についての対話』にみられる人間論について」『REHK』13(2005), pp.73－83. なお，オルティス個人，特にその交友関係について，2006 年 González Rolán らが発表した最新の研究書にはこれまでの先行研究にはなかった踏み込んだ記述がみられる。GONZÁLEZ ROLÁN, T. ,B AÑOSB AÑOS ,J. M. y S AQUEROS UÁREZ-SOMONTE, P. ,*El humanismo cristiano en la Corte de los Reyes Católicos: Las Consolatorias latinas a la muerte del Príncipe Juan*, Ediciones Clásicas, Madrid, 2006, pp. cvi-cix.

[2] 三つのうちの第三の要素の言及において，本著の中で著者オルティスは箇所によって異なる語を用いている。主に disciplina (p. 103, p. 104, p. 105, p. 106, p.149.), razón (p. 104) saber (p. 108.) などである。日本語に訳すにあたり複数の語句が翻訳として考えられるが，本稿では，論脈及び，著書の引用元であるアリストテレスの著書の日本語訳の両者を考慮したうえで，理（ことわり）を用いることとした。

と「完成」するために，自然によって具わる本性は，あくまで一必要条件であり十分条件ではないとしていた。人間は潜在能力（理性）を有しているに過ぎず，その能力を開花させ「完成」を実現させていくためには，外からの働きかけによる援助が必要とされる。それが「教育」である。このような理論に立ったオルティスにとって，教育の目的が「善なる人間の完成」にあったことは明らかである。では，オルティスはその目的のためにいかなる教育を提示したのであろうか。

本稿では，人間論にとどまった前回の考察に続き，『対話』の主要部分であるアロンソ・オルティスの教育論を考察の対象とする。その内容と議論の展開を追って考察した上で，そこに見出される特徴を人文主義思想との関連の中で明らかにしてみたい。

本著の中でも教育に関する論議は十七章にわたって展開される長大なものであるが，本稿では大きく三つの論点に絞って考察を試みる。三つとは時期，内容そして環境である。時期とは，古代からよく論じられてきたテーマでもある，幼児の教育はいつ開始されるべきかという点を問題とする。二つ目の内容とは，何を教えるべきかという問題であり，ここではオルティスは具体的に読書と心身の訓育の二つのテーマについて論じている。そして三つ目の環境とは，幼児が置かれるべき教育環境について，とりわけ教師，親そして仲間など幼児を取り巻く人々の資質や振舞いが主な論点となっている。

1. 教育の時期「いつ始めるべきか」

人間の初めての教育はいつ開始されるべきかという問題について，古代の哲学者や思想家は様々に意見を述べており，古典に傾倒する 15，16 世紀のイタリアやカスティーリャ人文主義者たちの間でもその関心は引き継がれていた。オルティスの教育論にもホラティウス，クィンティリアヌス，ヘシオドス，エラトステネス，アリストテレスなど数多くの著者の意見が引き合いに出される。

この問題をめぐるオルティスの議論を見ると，二つの点が我々の興味を引く。一つは，オルティスが，幼児が言葉を使用し始める時期を教育係をつけ始める時期の目安と見做している点であり，もう一つは，善い習慣づけの教育の開始時期と言語教育のそれとを区別して定めている点である。

第一の点について，オルティスはまず，「粘土[3]や泥はやわらかく湿っているうちに，絶え間なく動く車輪で型をつけるべし」とするペルシウスの言を引き，善い行いをする習慣を身に付けさせるためには，人間もやわらかな心をもつ幼子の時期を逃すべきではないと主張する。そして「やわらかな心」の時期として目安になるのが，幼児が「言葉を使い始めた時」である。オルティスは，論拠としてホラティウスを引用する。

枢機卿　「このこと（幼児が言葉を使い出したときが教育者をつけるべき時であるということ）について，ホラティウスが『詩論』の中で書いている。『言葉で表現することが出来るようになり，またしっかりした足どりで歩くことを覚えた子どもは，他の子どもたちとけんかしたり，怒ったかと思うと治まったりと絶えず変化するものである。よって，子どもは言葉を使い歩き始めて以後，だんだんと向上を感じ始める。（...）教育係や周りの子どもたちによって行われる有徳の行為の例を目にするようになるだろう。彼らは法や規則に適った習慣を形成し始めるものである。』」[4]

幼児のやわらかい心に邪悪な考えや欲望が入り込んで染み付いてしまわないうちに，教育係につけ，善い振舞いや正しい行いに慣れさせるべきである。オルティスは，そのために「言葉を使い始める時期」を逃してはならないと強く主張する。「言葉の使用」を感情表現手段の獲得と捉え，それと同時に躾を始めるということは，感情を理性でコントロールすることを幼子に覚えさせることであるとした。言語の使用は，人間を他の動物と区別する人間特有のものとしてルネサンス期の人文主義者たちが着目した能力であった。幼い子どもが言葉によって自らの感情を表現し他者に伝達できるようになったときが，人間としての他者との交わりの第一歩である。その時期を善き習慣

---

[3] A. Ortiz, *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos* (Madrid, 1983), p. 150. Bertini のカスティーリャ語訳には creta（石灰質岩石）と記述されているが，オルティスの手稿本を確認したところ，arcilla（粘土）が正確と見られる。

[4] *Ibid.*, pp. 150-151. HORACIO, *Arte poética*, 155-160 が引用元と思われる。

づけの開始時期としたオルティスは，「善く振舞うこと」つまり倫理的徳を対人関係の中で捉えていたことが覗われる。

習慣づけの面ではやわらかい心の時期を逃してはならないと繰り返し主張する一方で，言語教育の面では早期に教育を始めるのは控えるべきだとしている。ふさわしい年齢は，古代から多くの知識人が目安としていたように 7 歳頃と定め，それより前に始めるのは適当ではないとする。幼い子どもは勉学の意義や本質を理解する準備が出来ていないし，言語学習は記憶力に頼るもので，幼児期に限らず生涯にわたって継続されるべきものであるから，辛抱強い努力の持続を幼いうちから強いるよりも，勉強を楽しみとして捉えられるように，徐々に慎重な計画に従って行う方がよいと説明する。言語学習の仕方についてはクィンティリアヌスの論を用い，教師はまず文字自体を覚えさせることに十分な時間を費やすこと，幼児の気を引くような楽しい教材を用いることなど，教える立場の人間に対し忠告を与える口調で叙述している。

2． 教育の内容「何を教えるべきか」

二つ目の論点である教育の内容について論じている部分では，具体的に書物と心身の訓育に重点が置かれている。

2． 1． 読書について

読書をめぐる議論を始めるにあたり，オルティスは，幼児期に柔軟な心で学んだ事柄は年数を経て老齢になっても染み付いているものであるから，幼少時の読書は人間形成に大きな影響をもたらすと，その重要性を主張する。続けて，読書を通して達成されるべき目的として，言語能力と道徳倫理の二面での修養を明らかにした上で，古代知識人やキリスト教父の説を引きつつ，幼児教育にはどのような読み物が適しているかを議論していく。

まず幼児に適切な読み物の一般的特徴としては，高潔さや生命の大切さを伝えるような，道徳に適った教養豊かな性質のものを選択せよとした。オルティスは，幼児期の記憶は生涯持続するというほかに，さらに人間の記憶力は，働かせれば働かせるほど向上するものであり，道徳倫理の形成にもより一層効果があると考えていた。議論の冒頭で，言語能力と道徳倫理の二面での修養が読書の目的としておきながらも，実際の議論の大部分は後者に費やされているのが分かる。

それでは，具体的にどのような読み物が効果的と言えるのか。オルティスは，ふさわしい読書の対象として寓話と宗教的書物の二つを挙げ，それぞれの利点について述べる。寓話に関して論拠とされるのが，ストラボンとプラトンである。

> 枢機卿　「ストラボンがその著『地理誌』第一巻で述べているが，そもそも寓話というものは，子どもたちが言葉を話す能力を身に付けることを容易にするために考え出されたのである。ギリシャ人たちは法律を分かり易く理解させるために寓話を利用した。立法者たちは，公共の利のために理性を授けられた動物としての人間の才能に気づいていたのだ。」[5]

オルティスは，高度な都市国家を営んでいたギリシャ人たちが，法規を遵守する人間になるための精神的準備の手段として寓話を用いていたことを指摘する。ギリシャ人は，寓話が理性豊かでかつ知識欲の旺盛な人間の育成に有効であると考えていた。その理由の一つは，寓話が実際に起こった事柄ではなく，作られた物語であることにある。むしろ作り話であるからこそ，人間に未知の新しい事柄を現実には考えられない形で教えることが可能であり，もの珍しいことや不思議なことを知ることは，人間に喜びをもたらす。人は寓話によって「知る」喜びを味わい，さらに「知りたい」という欲求を湧き上らせる。寓話は人々に知識欲の高まりをもたらしてくれるというのである。また，寓話のもう一つの利点は，その分かり易さにあるとする。哲学者の説く理論は，いくら崇高で高徳でも複雑難解で教養の低い人々や幼い子どもの魂には入り込みにくく，信仰心を植え付けるのも困難である。他方，奇跡を語る寓話の物語などは，人々に神を畏れること，悪を避け善を進んで行うことを容易に教え込むことが出来るというのである。

オルティスがこのように寓話を用いることの有効性を強調する背景には，当時寓話を「虚偽に溢れた」かつ「異教徒の」作り話として軽視する傾向があったことを考慮すべきであろう。そのような否定的見方に対し，オルティスはさらにストラボンを引いて反論する。古代人にとって，教育というのは

---

[5] *Ibid.*, p. 159. オルティスによるこのストラボンの引用部分は，ESTRABÓN, *Geografía*, Lib. I, 2-8-c19 に見出される。

幼児期から人生の最後まで続くものであり，人間の成長過程それぞれに適した読書による「教育」がある。幼児期には寓話，続く思春期には歴史的偉業を語る物語，そして成人してからは哲学書と，人間は生涯，その時期その時期に合った読書を通して，モラル意識と物事についての知識を段階的に増加させていくものであると説く。オルティスが，幼児に限らず人間教育全体における読書の意義を認識していたこと，さらに歴史物語や哲学書などの宗教書以外の分野の読書を人間の成長に必要なものと捉えていたところに人文主義教育的要素を見出すことができよう[6]。

なお，寓話の中でも特に幼児のためには，イソップの童話や詩が楽しくかつ道徳的にためになると薦め，寓話の議論を終了する。

一方，子どもたちを「信仰へ導く書物」に関する議論では，ヒラリウスの『三位一体論』やトマス・アクィナスが用いられる。

> 枢機卿　「幼子が話し始める時期は，宗教や敬虔さや信仰心へとその子を導いてくれる読み物を与えるのに大変適している。それらはキリスト信仰の確たる真理であり，学べば大いなる喜びをもたらすからである。（...）信仰によるこの神の認識をもってして真理の知は得られるのである。（...）信仰こそ我々を知へ導く本当の道であり，信仰を通して，あらゆる汚れから清められた霊魂は，届きがたきあの光に到達できるであろう。（...）」[7]

信仰の書に幼いころから親しむことで信心を深め，キリストの教えを学ぶことで神の真理に近づいていく。真理を知る道こそが，あらゆる霊魂が求める最終目的である至福直観の恩恵に我々を導く道なのである。子どもたちには幼いうちから，その道を歩ませなければならない。

---

[6] ルネサンス期の人文主義者たちは，人間が人間としての価値を高めていくために必要な人間教育として，「文法・レトリック・歴史・詩・道徳哲学」の五つの学問を掲げた。これら五つはフマニタス研究 studia humanitatis と称される。Cf. P. O. Kristeller, *El pensamiento renacentista y sus fuentes* (México D. F.: 1982), pp. 40-51.

[7] ORTIZ, A., *op. cit.*, pp. 161-163.

このように，オルティスは幼児教育に信仰の書物を用いることの大切さを，カトリシズムの模範的説明で締めくくるが，それと同時にこの結論によってある新たな議論を導入する。オルティスは対話者の一人である王妃に，古代哲学者たちは，倫理的徳を培う道こそ，人間が善へと，やがては最終目的の至福へと向かう道と説いたのではなかったか，と疑問を提示させる。

王妃の対話相手でオルティスの代弁者である枢機卿は，この疑問に応え，人間の本性について問い直すことから始める。まずプラトンの論を示し，その後にキリスト教側の理論を続ける。

枢機卿　「ところで，ある哲学者たちがたとえ真理の道から外れていようとも，また神の恩恵に照らされていなくとも，彼らには生まれながらの明かりが備わっていた。しかし，哲人プラトンは，アプレイウスの言うところによれば，人間は本来生まれながらにしては善にも悪にも傾いていないが，やがていずれかに傾いていくように出来ていると述べた。（...）子どもたちの中に徳を育て，彼らが正義の法則に従って命じたり命じられたりするようになるべく習慣を教え込む教育者を選ぶことが大切だと言っている。（...）一体誰が我々に，原罪は子孫末裔に伝承されたゆえ，我々は汚れた血筋から生まれたと言ったのか。（...）聖書は，人間は青春期から年ごとに悪へ傾いていくと言われている。だからこそ，我々は，キリストの血をもって処方と薬を与えてくれる教会の秘跡を通してこの身を清めるのである。それにもかかわらず，原罪の法という染み跡は残っており，それゆえ我々は，霊魂に反して肉体が叛乱を起こすのを目にするのである。」[8]

プラトンの人間観に比べると，キリスト教説は悲観的感を免れない。オルティスはその上で論を続ける。

枢機卿　「キリスト教徒たる者，人間はその巡礼の間つねに休まず戦い続けるものであることを慮るべきである。知ってのとおり，

[8] *Ibid.*, pp 164-165.

ヨブの定めるところによれば，我々のこの世での生は戦いである。そしてその戦いのために人間は，秘跡と徳とそして神の恩寵をもって補われなければならないことも。さらにキリスト教徒は，授けられる徳より以前に魂に生まれながらに具わる本来の力を利用するべきである。それらの武器で固めた人間は，彼に対して押し寄せ来るあの勢力にも必ず勝利することを疑わぬように。」[9]

人間の善悪への傾倒を後天的なものとするプラトンの楽観的視点に対し，オルティスは，原罪という「因」ゆえに生まれながらに負の「果」を内包する人間観を保持するキリスト教の悲観的視点を対比させている。

人間の本性をめぐる二つの思想の対立の構図を前にして，オルティスはいずれか一方の正当性の追究を試みるのではなく，キリスト教徒としてどう生きるべきかという点に問題の焦点を持っていくのである。

人間は原罪の結果として，常に悪の力に対抗して戦い続けなければならず，その武器となるのがキリストの教えであり，徳であり，神の恩恵である。オルティスは，神学的視点から信 fe・望 esperanza・愛 caridad という徳を我々の助けとしながらも，それらの対神徳以前に人間は本来自然によって自らの中に具わっている能力を活かすべきであるとする。その最大たるものが理性の力であり，これによって人間は，神の理解を可能にする真の知へと向かうことが出来る。それが至福直観への道なのであると結論付けた。

読書のテーマを発端として，オルティスは人間の幸福追求の問題へと議論を発展させた。この問題は当時，「人間は現世において幸福に到達できるか否か」を論点に盛んに議論されていたテーマであった[10]。オルティスは，教育論の枠の中でこの問題に取り組み，カトリック教義と異教的とされていたプラトン思想を融和する形で締めくくったと捉えることが出来よう。

---

[9] *Ibid.*, p. 165.

[10] ルネサンス人文主義者たちは，中世以来「死後に神の恩寵によってのみ到達可能である」とされていた幸福の概念を，現世の生の中で捉えようと試みた。ナポリで 15 世紀前半に起こったバルトロメ・ファツィオとロレンツォ・ヴァッラの論戦はよく知られている。この二人の論戦のカスティーリャにおける影響については以下を参照。O. di Camillo, *Humanismo castellano del siglo XV* (Valencia: 1976), pp. 244-265.

2．2．心身の鍛錬

読書の他に，人間は善となるためにいかなる修練を積むべきかという問題について，オルティスの議論はプラトンの心身相関構造のテーゼを出発点とする。人間という存在は身体と魂からなるゆえ，神はその両面が健全になれるように，「身」と「魂」のためにそれぞれ異なる技術を我々に伝授した。「身」のための技術には，医術 medicina と体育術 gimnasia がある。身体の健康を保つのに必要なのは前者であるが，古代ギリシャ人は健康だけでなく身体に美と調和を具えることを追求し，そのための技術として体育を行った。体育を指導する者は体育術の師 paidotribes と呼ばれて，若者の訓育に努めたとする。この体育の奨めの部分で，オルティスはアリストテレスに従い，「それぞれ個人の状態や能力に応じて運動を変更して行うのがよろしい」[11]と述べ，人間の身体的個体差についての認識を示している。

一方，「魂」についてもオルティスはプラトンの論を用い，清廉さを意識し公正であることを常に欲する人間になるための二つの技術を挙げている。

> 枢機卿　「一つ目はギリシャ語で nomotética といい，ラテン語で立法の技術と呼べるものである。(...) 法を立てるときに基準を教え，そしてプラトンの言明するところによれば，間違いなく法律を監視する基準であり，裁きの基準である。(...) nomotética は魂を正しい判断に導く法の学問である。(...) 公正さにつながるもう一つの精神的技術は，プラトン自らによって justicia と呼ばれるものである。その役割は，我々人間が隣人同士の関わりの中で判断においても行動においても正しい道を続けることである。(...) nomotética の名の下には，観想に関係し，また真理を知ることを追求するすべての学問が含まれると思う。というのは，他の行為に役立つものではないからだ。極めて当然のことながら，justicia の名の下には，活動的生活の利を得ようとするすべての事柄が含まれると考えてよいと思われる。」[12]

---

[11] *Ibid.*, p. 172.

[12] *Ibid.*, p. 174.　Cf. PLATÓN, *Gorgias*, 464B-D.

結果としてオルティスはプラトンの魂を世話する二つの技術について，nomotética (nomothetikê＝「立法の技術」の意[13]) は思惟や理性によって物事の真相をつかもうとする思弁の領域に属するものであり，justicia (dikaiosynê＝「司法の技術」の意) の方は実践的生活において個々の利益を得ようとするときに拠りどころとなるものと捉えている。そして，人間が社会の中で正義を保ちつつ真っ直ぐ生きられるようになるには，思弁と実践の両面において修練を積むことが大切であるとする。

このことを踏まえて，オルティスは実践と観想の両面から若者たちに教え諭すことが出来る教育者が必要であるという結論に至り，学識があり学問の面でも習慣の面でも良き手本となる教育係を選ぶべきであるとして，次の論点である「周囲の人々の資質」へと移っていく。

3．環境「幼児にとってふさわしい教育環境とは」

幼児の教育環境を論じる部分で重要視されているのが，周囲の人々の資質や振舞いである。オルティスは，それらが幼児に多大な影響をもたらすことを指摘している。

> 枢機卿　「（...）ソロモンも言っている。『賢者と共に歩む者は，その者も賢者となろう。愚かな者たちの友は，やがて彼らと類似しよう。悪は罪人についてまわり，善は正義の者たちの間で分かち合われる。』」[14]

「周囲の人々」の中でも具体的に言及されるのが，教育係，仲間の子どもたちそして親である。

第一に教育係については，幼い子どもの善い習慣づけは教師次第であるとするほど責任の重さを強調する。備えるべき条件として「誠意ある人物で，その訓戒は慎み深く，その振舞いは聖人のごとく汚れない人間」であることに加え，「命の大切さを教えることが出来る者」であるべき，としている。さらに，特に王位を継ぐ地位にいる子どもに付く教育係に不可欠な務めとし

---

[13] 日本語訳については，廣川洋一『ギリシア人の教育－教養とは何か－』p.66 を参照。

[14] ORTIZ, A., *op. cit.*, p. 180.

て，幼子がカトリックの信仰心を育み信仰の擁護者へと成長していくよう導くことが出来なければならないとする。信仰の道から外れないためには，善良で信心深い遊び仲間に囲まれて育つことも効果があるとしている。

教育係の責任を重大視しながらも，オルティスは親の役割にも注意を促し，特に二つの点について厳しい調子で警告している。一つは，親による甘やかしであり，オルティスはそれを「柔弱な教育」と呼び，子どもたちの心身をだめにするものとして再三戒めている。特に王子の場合は，高価な品や珍しい物や新しい物を与えすぎないよう気を配り，贅沢やわがままに慣れてしまう前に，時期を逃さず躾けるべきであるとする。もう一つは，親自身が子どもの鑑としての自覚を持つことである。ここではユウェナリスの言葉を引用し，保護者の行いは，手本として子どもの魂の中に染み込んでしまうという。

> 枢機卿　「（...）アクィナスのユウェナリスがこのことについて語っている。（...）『結局のところ，あなたが怒りに任せて何か非難すべきことを犯したら，あなたの息子は身体や顔つきばかりか習慣までが，あなたにそっくりになるでしょう。そしてあなたという手本に続き，息子はあなたよりさらに低い所へと堕ちてゆくでしょう。（...）』」[15]

親の習慣（振舞い）は，子どもに直接反映されていくものであるから，良き模範を示していくことが親の責任であるとする。

オルティスはその教育論を結ぶにあたり，学問や体育を教育する人々に最後の忠告を呈する。それは「本人の個性，場所そして時に適った」教育を行う配慮である。人間には生まれながらに様々な才能があり，それによって持つ興味や能力も異なってくる。教育係は，学問や体育を教える際にそれぞれの子どもの生まれながらの能力や才能を注意深く見抜き，それらを伸ばしていく配慮をもって教育に取り組むべきであるとする。ここでは一種の人間類型学が下敷きになっている。

また，その人間がいる場所，つまり属する社会の多様性も考慮に入れるべきであるとする。環境が異なれば，法律や規則も異なるものである。人間

---

[15] *Ibid.*, p. 157

の分別の善悪は，その現実に応じて定められるものであり，絶対確実な定め方などないとする。

万物は無常であるという視点から，オルティスは，時による変化に応じた教育にも言及するが，その中でも年齢による人間の理性の進化について扱っている部分が興味深い。

> 枢機卿　「（...）しかし医者ヒポクラテスは，人間の一生を六つの時期に区切った。一つ目の区切りは 7 歳，二つ目は 14 歳，三つ目は 28 歳，四つ目は 35 歳，五つ目は 42 歳，六つ目は 66 歳そして七つ目の区切りは人生の最期の段階と一致している。このことは聖トマスも認めているが，最初の三つの七年間に人間の知能は三倍化する。アリストテレスが言うことには，第一の時期には自力だけではもちろん誰かの助けをもってしても物事を理解することは出来ない。第二段階になると，他の人の助けを利用して理解できるようになる。第三段階では人からものを教えてもらい，さらにそれを応用できるようになる。確かに，理性は人間の中で少しずつ発展していくものなのである。（...）」[16]

このようにオルティスはヒポクラテスの人生区分法に則り，理性の段階的発展を示しながら，それに応じて教育方法を変えていくようにと説く。第一期終了の 7 歳頃には，他者の助けがあれば物事が理解できるようになるから，この時期にはよき援助となる教育係の監督の下に子どもを置くべきであるとする。次の第二期が終わる 14 歳頃には，知能は大きく成長する時期に入るため，それまでとは異なる方法で様々な種類の学問を教えていくべきであるとする。このヒポクラテスの人生区分の理論は，16 世紀以降多くのルネサンス人文主義者たちによって教育を論じる際に活用されることになる。

最後にオルティスは，親による子どもの甘やかしを再度戒め，幼子の教育のためには我々の振舞いを律することが肝心と説いて教育論を終了する。

オルティスの教育論は，一貫して人間は後天的に外的要素によって善になれるという確信のもとに成り立っており，その中でも顕著な点は，倫理的

---

[16] *Ibid.*, pp 184-185.

徳 virtud moral の追求に大きな比重をおいて議論が展開されていることである。善い振舞いや正しい行いの習慣づけを重視するからこそ，言葉を発し始めたばかりの時期から躾け教育を開始することを奨め，読み物の傾向についても道徳性を重んじる観点から寓話の利点を強調した。教育者や親にあるべき資質に関しても，同様の点が求められている。それに比べると，学問や学識の勉学面やカトリック教義に基づく信仰面に関する議論の比重は少ないようにも見受けられる。このことは，本稿の冒頭で示したように，オルティスが「教育の目的は善なる人間の完成にある」という視点に立って教育を論じていることを思えば尤もと言えるかもしれないが，ここで注意すべきなのは，オルティスが倫理的徳を現実の生の視点から扱っている点である。つまり，徳の概念を振舞いや行いなど人間の実践的（社会的）生の中において論じている。人と人との関係の中で，いわば社会の一員として法律に従い正義を重んじ，進んで「善く」振舞える理性的人間へと成長していくことが「人間の完成」への道であると捉えていたと考えられる。この点において，本教育書で扱われた教育は，幼少教育に限定されるものではなく，むしろ古代ギリシャ人たちが説いた人間としての教育・教養（パイデイアー）と呼んだものと共通の特徴を示していると言えよう。この教育観は 16 世紀に入り，新しい人間論に基づいて社会に新たな教育プロジェクトを打ち立てようとするカスティーリャの人文主義者たちによって一層確たるものに発展していく。

また，幸福論の観点から見ると，オルティスの実践的生重視の傾向は，観想的生を至福直観への道と説く中世スコラ的幸福観に投じられた一石として捉えることもできるが，それについては考察を別の機会に譲りたいと思う。

おわりに

「人間は理性ゆえに完成可能な存在である」という人間論を基盤として始められたアロンソ・オルティスの教育論は，主に子どもを「善い」人間へと育成するためにはどうすればよいかという視点から議論が展開された。

その考察を通してオルティスが，「善なる人間」が完成するために倫理的徳を重要な要素とし，その育成・習得を実践的生活の中で捉えていたことが見出された。本稿では深い考察に及ばなかったが，この倫理的徳の問題は当時知識人の間で盛んであった幸福についての論争と密接に関連している。ルネサンスの思潮の中で，普遍的人間像を求める人文主義者たちの目は，人間の最終目的，すなわち幸福の問題へと向けられた。「人間の最高幸福とは

なにか」，「いかにして到達できるのか」というテーマをめぐって議論が交わされ，その中で「倫理的徳」は，対する「知性的徳」とともに，「最終目的」に到達するための道として重要な位置を占めていた。オルティスが示した倫理的徳に対する現世的視点は，アロンソ・デ・カルタヘナら 15 世紀カスティーリャ初期人文主義者と呼ばれる知識人たちが，新しい思潮の中で人間の徳の概念を見直し始めた視点と共通するものであった。実際，本著においてオルティスが教育論の後に続けて取り掛かるのが「人間の幸福」についての議論である。アロンソ・オルティスの『対話』は，人間論で築いた基盤の上に教育論を展開し，人間の幸福論へと発展していくのである。

本稿では，教育論の考察を通して，オルティスが倫理的徳を養うことを「善の完成」もしくは「幸福への到達」に続く道として非常に重要視していることは明らかになったが，幸福（善）の本質についてのオルティスの考えは明確な形では見出されなかった。この点については，本著後半の幸福の議論の部分を考察する際の課題としたい。

参考文献

ABBAGNANO, Nicolás: *Historia de la filosofía*, vols.1 y 2, trad. por Juan Estelrichi y J. Perez Ballestar, 4ªed., Hora, Barcelona, 1994.

ALCALÁ, Ángel: "Juan de Lucena y el pre-erasmismo español", *Revista Hispánica Moderna*, Vol. XXXIV, núm. 1, Enero-Abril, 1968, pp. 108-131.

ARISTÓTELES: *Ética Nicomáquea*, Introducción por Emilio Lledó Iñigo, traducción y notas por Julio Pallí Bonet, 5ª ed., Gredos, Madrid, 1985.

BERTINI, Giovanni Maria: "Un diálogo humanístico sobre la educación del príncipe Don Juan", en Congreso de Historia de la Corona de Aragón, *Fernando el Católico y la Cultura de su tiempo*, Institución Fernando el Católico-Diputación Provincial, Zaragoza, 1961, pp. 37-62. [Reproducido en su edición de Alonso Ortiz, *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Porrúa, Madrid, 1983, pp. 1-40.]

CAMILLO, Ottavio di: *Humanismo castellano del siglo XV*, trad. por Manuel Loris, Fernando Torres, Valencia, 1976.

_____: "Humanism in Spain", en RABIL, Albert Jr. (ed.), *Renaissance Humanism. Foundations, Forms and Legacy, vol.2. Humanism beyond Italy*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1988, pp. 55-108.

DELGADO CRIADO, Buenaventura (coord.): *Historia de la educación en España y América*, Fundación Santa María, Morata, Madrid, t. I. 1992; t. II, 1993.

GALINO CARRILLO, María Ángeles: *Los tratados sobre educación de príncipes. Siglos XVI y XVII*, CSIC, Madrid, 1948.

KRISTELLER, Paul Oskar: *El pensamiento renacentista y sus fuentes*, 1ª ed. en español, trad. por Federico Patán López, Fondo de Cultura Económica, México D. F., 1982.

LABOA, Juan María: *Rodrigo Sánchez de Arévalo, alcalde de Santángelo*, Fundación Universitaria Española, Seminario Lebrija, Madrid, 1973.

NEBRIJA, Antonio de: *La educación de los hijos*, Estudio, edición, traducción y notas por León Esteban y Laureano Robles, Universidad de Valencia, Valencia, 1981.

ORTIZ, Alonso: *Diálogo sobre la educación del Príncipe Don Juan, Hijo de los Reyes Católicos*, Versión, notas e interpretaciones por Giovanni Maria Bertini, Porrúa, Madrid, 1983.

廣川洋一　『ギリシア人の教育ー教養とは何かー』　岩波新書　1990年.

アルフォンシーナ・ストルニィにおける
ロマン主義的要素に関する一考察
－燕のモチーフを中心に－

中村多文子

はじめに

アルゼンチンの詩人アルフォンシーナ・ストルニィ Alfonsina Storni（1892－1938）は[1]、ラテンアメリカの後期モデルニズムに属する詩人とされている[2]。一方で、20 世紀前半のラテンアメリカ文学において、ロマン主義を特徴にもつ女性詩の先駆けとも評価され[3]、Pérez Blanco は処女作 *La inquietud del rosal* をはじめとした前半の作品にロマン主義の特徴が窺えると指摘している[4]。その理由として、「yo（私）」の称揚（la exaltación del yo）が際立ち、恋愛詩が多く、内容が悲観的である点を挙げている[5]。この見解は研究者の間で広く受け入れられている。また、Astrada de Terzaga はストルニィの作品を読むためには彼女の生涯を知ることが欠かせないとし、とりわけ 25 歳までの経験が詩に反映されていると考えた[6]。例えば、ロマン主義的なテーマである自然に対する愛は、ストルニィが幼い日々を過ごしたアルゼンチン北西部サン・フアン県の豊かな緑や広大な大地に求められている[7]。弱き者への愛は、自らが幼い

---

1 ストルニィの生涯、作品リストおよび 1977 年までにおける先行研究の整理については、拙稿（2003）：「アルフォンシーナ・ストルニィ（1892－1938）－アルゼンチン女流詩人の人生と作品群についての一考察－」『REHK 京都外国語大学イスパニア語学科修士会』第 11 号参照。

2 González Echeverría, Roberto and Pupo－Walker, Enrique (1996): *The Cambridge History of Latin American Literature,* Vol. II：The Twentieth Century, New York, Cambridge University Press, p. 66.

3 Armani, Horacio (1981): *Antología esencial de poesía argentina (1900－1980)*, Buenos Aires, Aguilar, pp. 14－15.

4 Pérez Blanco, Lucrecio (1975): *La poesía de Alfonsina Storni*, Madrid, Villena, pp. 367－368.

5 *Loc. cit.*

6 Astrada de Terzaga, Etelvina (1967): “Figura y significación de Alfonsina Storni”, *Cuadernos Hispanoamericanos*, Vol. 211, pp. 127－144.

7 例えば、*La inquietud del rosal*（1916）に収められている Resurgir や *Languidez*（1920）に収められている El canal などがある。

頃から経済的に恵まれなかったことから、貧しい子どもたちへ注がれている[8]。そして、この弱き者たちが休息する地は、詩人自らが追い求める理想の境地として作品に描かれることになる。確かにストルニィの作品世界はロマン主義によって描かれる理想的な世界と通じるものがあると考えられる。しかし、彼女は、日常の苦しみから逃れるために詩を書いたと回想している[9]。貧しい移民の家庭に生まれ、20歳で未婚の母となったがゆえに周囲から偏見の目で見られて小学校の教員の職を失い、最愛の男性に裏切られ、最終的には自殺という道を選んだ。彼女の詩作活動が日常の苦しみから逃れることであったことを踏まえれば、作品に見られるロマン主義的な要素は、単なる芸術表現の手段としてではなく、むしろストルニィ自身の感情を最も効果的に表現するための必然的な選択であったと考えられないだろうか。

ストルニィは、1916年から1938年までに7冊の詩集を発表した。従来のストルニィ研究では、イスパノアメリカ文学の流れやストルニィが扱ったテーマや詩形などに従い、彼女の作品を次のように分類している。第1期を第1作 *La inquietud del rosal*（1916）から第4作 *Languidez*（1920）まで、第2期を第6作 *Mundo de siete pozos*（1935）と第7作 *Mascarilla y tré bol*（1938）とし、第5作 *Ocre*（1925）を第1期から第2期の転換期と位置づけている[10]。

そこで本稿では、ロマン主義的要素の濃い第1期の最後の作品とされているストルニィの第4作 *Languidez* に収められている中から「Han venido ...」を軸に、詩人がロマン主義的な要素を使って、いかに独自の世界を展開していったかを全7作に言及しつつ分析する[11]。

分析のてがかりは、ストルニィの作品に多く登場する燕とする。彼女は第1作に収めた Resurgir において、永遠の平静を象徴する

---

[8] 例えば、*La inquietud del rosal*（1916）に収められている Ansiedades や Del arrabal などがある。

[9] De Miguel, María Esther (1998): *Mujeres argentinas: El lado femenino de nuestra historia*, Buenos Aires, Alfaguara, p. 134.

[10] 1940年代から1970年代までの先行研究の分析については，中村(2003): *op. cit.*, pp. 68－72。

[11] 本稿で引用する作品は Muschietti, Delfina (1999): *Alfonsina Storni, obras, poesía*, t. I, Buenos Aires, Losada.に収められている。

燕を手に入れることが幼い頃の何よりの願いであったと吐露している[12]。さらに、精神や肉体そして思想に翼を持って生きていくこと[13]を理想とし、燕に自由というイメージを見出している。そこには、未婚の母として保守的な社会に立ち向かったストルニィの生き様が垣間見える。彼女は、伝統的な生き方はできないと考え、自由を望み、自分の生き方を探したのである[14]。本稿では、ストルニィの化身とも思われる燕のモチーフの変遷をたどることで、彼女の作品のロマン主義的要素について考察を進めていく。

1. Han venido ... について

Languidez に収められている Han venido...[15]は、ある春の日に母親と妹たちが「私」のもとを訪ねてくる様子を描いた物語詩である。節や韻に規則はなく、自由なスタイルであり、これは彼女の第1作から第4作までの作品に特有である。

この詩はストルニィが 28 歳の頃の作品である。当時、彼女は4才の息子と共にブエノスアイレス市に住んでいた。文壇にデビューして4年が経ち、女性詩人としての地位を築きつつあった。ストルニィの父親は既に死んでいた。兄や弟はストルニィと一緒に暮らしていなかった。姉も結婚して自立していた。母親は再婚して一女を儲けていた[16]。異父ではあるがこの唯一の妹はストルニィとは年が16才離れており、サンタ・フェ県のブスティンサという小さな村に暮らしていた。母親は私塾を開校しており、経済的な基盤はあった[17]。ストルニィの場合と違い、この妹は恵まれた環境で育ったと考えられる。このように、ストルニィの家族とこの詩に描かれる家族は必ずしも一致しないが、彼女の家族との距離がモチーフとして反映されている。

---

12 Muschietti (1999): pp. 49－50.
13 *Loc. cit.*
14 *Irremediablemente*（1918）に収められている Peso ancestral や Bien pudiera ser にその背景や心情が読み取れる。
15 Muschietti (1999): pp. 236－237.
16 *Ibid.*, pp. 34－35.
17 Nalé Roxlo, Conrado, Mármol, Mabel (1966): *Genio y figura de Alfonsina Storni*, Buenos Aires, Editorial Universitaria de Buenos Aires, p. 41.

Han venido ...

Hoy han venido a verme
Mi madre y mis hermanas.

Hace ya tiempo que yo estaba sola
Con mis versos, mi orgullo... casi nada.

Mi hermana, la más grande, está crecida,
Es rubiecita; por sus ojos pasa
El primer sueño. He dicho a la pequeña:
－La vida es dulce. Todo mal acaba...

Mi madre ha sonreído como suelen
Aquellos que conocen bien las almas;
Ha puesto sus dos manos en mis hombros,
Me ha mirado muy fijo...
Y han saltado mis lágrimas.

Hemos comido juntas en la pieza
Más tibia de la casa.
Cielo primaveral... para mirarlo
Fueron abiertas todas las ventanas.

Y mientras conversábamos tranquilas
De tantas cosas viejas y olvidadas,
Mi hermana, la menor, ha interrumpido:
－Las golondrinas pasan...[18]

来てくれた・・・

[18] Muschietti (1999): pp. 236－237.

今日、私に会いに来てくれた
母と妹たちが。

もう長い間、私は一人だった
詩と共に。私の誇りは・・・　ほとんど何もない。

一番上の妹は、すっかり大きくなった
金髪の少女。彼女の目に
最初の夢が映る。私は幼き妹に言った
「人生は優しいもの、どんな悪いことも終わる・・・」

母は笑みを浮かべ
心をよくわかっている人たちがするように、
私の肩に両手を置いて、
私をじっと見つめた・・・
そのとたん私の涙が溢れ出た。

私たちは一緒に食事をした
家の一番暖かい部屋で。
春空・・・　それを眺めるために
全ての窓が開けられた。

私たちが穏やかに話していると
たくさんの忘れてしまった昔のことを、
小さな妹、末の妹がさえぎった
「燕が通り過ぎるわ・・・」

第1節では、母親と妹たちが訪ねてきたことが語られる。その日は「Hoy今日」で表されているが、動詞は主として過去時制が使われていることから、語り手はその日を回想していることがわかる。母親と妹たちが訪ねた先は、「me」つまり語り手自身であり、語り手自身が住む家であろう。家族との再会の場面が静かに語られ始め

る。

第２節では、語り手が主人公である「私（yo)」自身について語っている。主人公はだいぶ以前から独りだったこと、詩を書き続けていたこと、誇りを持ち続けていたこと、しかしながら虚無感に包まれていたことが語られる。Yo estaba sola の sola は、語り手が１人の女性であることを示す。

第３節では、妹のうち一人だけが登場人物の中で唯一、容姿が描写されている。妹たちのうち一番年上の少女に対し、会わないうちにだいぶ大きくなった、とその成長ぶりを喜んでいる。そして、金髪で、色が白い妹は、「私」に目を輝かせて自分の夢を伝える。彼女は「私」にとってはまだ幼さが残る存在であろうか、「la pequeña 幼き少女」と映っている。夢を聞いた後「私」は妹に、「人生は甘美で、すべての悪いことは終わる」と告げる。詩の中で、唯一「私」から発せられた言葉である。実は、これはストルニィが母親から学んだ人生の有り様であった。母親は、まだ 12 歳のストルニィが初めて書いた詩がストルニィ自身の死についてであることを知り、幼い娘が人生に絶望していることを悲しみ、この言葉を教えたという[19]。家族との再会を描いた詩であるにも関わらず、「私」と家族との対話が現れないことに注目すれば、「私」は妹にその言葉を伝えながら、孤独のうちに詩を書き続けていた数年間、その言葉を自分自身に言い聞かせていたと解釈できないだろうか。この点については、「３．燕がいる春」で改めて考察する。

第４節では、母親が登場する。母親は人の心というものがよくわかっている人に特有な優しい微笑をたたえ、慈悲や寛容の精神を象徴しているようである。母親が私の両肩に手をあて、私をしっかりと見つめると、私の目から涙が溢れ出す。母親は、かつて自分が娘に伝えた言葉、娘がその妹に伝えた場面に遭遇したのである。母親と「私」にとっては大きな意味を持つ言葉であったと考えられる。「私」が思わず流した涙についての解釈は、ストルニィが母親をモチーフにした作品を分析する必要があるため、本稿では扱わないこととする。

---

[19] Nalé Roxlo, Mármol (1966): p. 23.

次の第5節では、家で食事をしている場面となる。登場人物が勢ぞろいしている。家の中でも一番暖かい場所であり、それは登場人物たちの心のうちの喜びや家族の温もりをも表しているのだろう。そして、春空を見るために窓が開けられている。

最終節では、春の暖かな光と風に包まれ、穏やかに思い出話をしている。話は昔の出来事やすでに忘れてしまっていた事柄に及んでいる。「私」が故郷で家族と過ごしていた懐かしい過去への郷愁である。話をさえぎって、一番年下の妹が春空を飛ぶ燕を見つける。春を告げる燕の到来が登場して、詩は終わる。

この詩の中心人物は語り手である「私」である。121語からなるこの詩において、「私」を示す1人称の人称代名詞は12回現れる。これに省略された主語と、1人称の主語に伴う動詞の形 estaba と He dicho、「私」を表す1人称女性形の単語 sola を加えると16回となり、総語数の1割を越す。この詩において語り手は、「私」について説明する、あるいは見つめるといった作業をしているのである。

しかし、第5節の家族と食事をしている場面では「私」は消え、「私たち」を主語にした動詞の活用と変化する。つまり、「私」が家族の一員として団欒の和に加わっている様子がわかる。独り sola ではなく、母親や妹たちと一緒 juntas であるという喜びが描写されている。孤独感からの解放を表しているように思える。母親と妹たちの到来は、las golondrinas と複数形で表されている燕の到来と重なっている。

しかし、一方で、この詩全体においてその日の記憶が過去時制で語られていることに着目すれば、「私」が家族と共有した時間が過去のことであることが判明する。一人取り残された寂しさは、集団で行動する燕、つまり複数の燕が通り過ぎる las golodrinas pasan... という一文に投影されていると読み取ることもできる。一人であることからの逃避として、一人ではない世界を創りあげている詩人の心中が窺える。この詩自体が孤独からの現実逃避であり、家族と共に過ごすという理想世界を表していると言える。

2．ストルニィにとっての燕

燕は春や豊饒の象徴でもあるが、不安や不安定さも表す。Han

venido...でも、燕が母親と妹たちの訪問に対する喜びを表すと共に春の到来を告げていたが、同時にいずれは去り行き、自分のもとに留まらない訪問者に、春を重ねている。ストルニィは燕から春の喜びを引き出してはいるものの、春の訪れに抱く不安という相反する感情も同時に表現していると読み取れる。

ストルニィはルベン・ダリーオを愛読していた[20]。ダリーオの詩に使用されている rosa、miel、flor、pájaro、seda などの語彙は、ストルニィの作品においてキーワードとなっているものが多いことからもわかる。ダリーオの作品において、特に燕と特定されないまでも、春を描いた詩には春を告げる鳥が登場する。鳥が告げる春に対し、ダリーオは“¡Oh, amada mía! Es el dulce／tiempo de la primavera.”[21]を繰り返し、春が甘美であることを強調する。ストルニィが Han venido...で描いた、母親と妹たちと過ごした理想の1日に抱いた穏やかで優しい感情が重なってくるようである。

グスタボ・アドルフォ・ベッケルもストルニィに影響を与えたと思われる。ベッケルの作品の中でもロマン主義的要素が濃い作品として評価されている *Rimas* の 38 番[22]に燕が取り上げられている。この詩が悲しい雰囲気に包まれているように、この燕は las oscuras golondrinas と暗い色の鳥として描かれている。ベッケルは、いとしき人のベランダや庭へ戻ってくる燕と戻っては来ない過去とを対比させ、詩の主人公の寂寥感を際立たせているのである。

ダリーオの描く明るい色の鳥と、ベッケルの描く黒い色の鳥は対照的である。この２つの相反する要素が、Han venido...の中で春の到来に対する喜びと同時に、春が遠ざかっていくことへの寂寥として１羽の燕に描き込まれているのだ。家族と再会することによって「私」が取り戻した家族の団欒や愛情や孤独感からの解放と共に、訪問客が去って行く寂しさや再び孤独な生活に戻っていかざるをえない寂しさといった感情が、同時に描かれている。相反する感情を燕のモチーフで描くというのは、ストルニィの作品に顕著な特徴と

---

[20] Gómez Paz, Julieta (1992): *Leyendo a Alfonsina Storni*, Buenos Aires, Vinciguerra, p. 104.
[21] Darío, Rubén (1968): *Azul*, Madrid, Espasa－Calpe, pp. 119－122.
[22] García Montero, Luis (2001): *Gigante y extraño, las rimas de Gustavo Adolfo Bécquer*, Barcelona, Tusquets, p. 167.

言える。

ストルニィの作品の中で燕が登場するものに、ロマン主義的特徴が窺えると評価される第1作の *La inquietud del rosal* に収められている Golondrinas[23]がある。この詩において燕は第1節から登場する。春を象徴するはずの燕は、悲しみの使者であり、黒い色で描かれ、夜や痛みを意味する（"Las dulces mensajeras de la tristeza son...／Son avecillas negras, negras como la noche,／¡Negras como el dolor!" [24]）。第3節では不安を抱く小動物（"inquietas avecillas" [25]）として描かれている。燕が住む場所を探して飛ぶ習性を持つことから、第4節では詩人は燕に移民のイメージを持たせている（"¡Oh! ¡Pobres golondrinas que se van a buscar／Como los emigrantes, a las tierras extrañas,／La migaja de pan!" [26]）。これは、ストルニィ自身も移民の子として生まれ、サン・ファン県からロサリオ市、そしてブエノスアイレス市へと自ら住む場所を変えていったことから、自分を燕に重ね、安住の地を求めて旅する燕というストルニィならではの燕に対するイメージが生まれている。

ストルニィは燕に死をほのめかす黒という色を与えている一方で、悲しみの使者であるのに dulce という優しい感覚を与えるような形容をしている。燕に重ねた自分に対する詩人の複雑な心境をも窺えるようである。

さらに、燕に対する「私」の行動を表す動詞に注目すると、命令形が使われていることがわかる[27]。「私」は強く燕を求め、喪に服した翼の燕に対して「春の燕よ、私のところまで飛んで来て」と自分に引き寄せている（"¡Golondrinas, llegaos! ¡Golondrinas, venid!／¡Venid primaverales, con las alas de luto／Llegaos hasta mí!" [28]）。つまり死と再生を自らの中で起こそうとしているのである。しかし、一見無謀なこの試みは、やがてその目的が明らかにされる。「私」は自分のもとにやってきた燕に、永遠の春がどこにあるか問

---

[23] Muschietti (1999): pp. 54－56.
[24] *Ibid.*, p. 54.
[25] *Loc. cit.*
[26] *Loc. cit.*
[27] 例えば、第5節の venid や第8節の llevadme などである。
[28] Muschietti (1999): p. 54.

う（“¿Sabéis dónde se encuentra la eterna primavera,／La fuente del amor?...”[29]）。燕は「私」を永遠の春、つまり愛の泉がある場所へ導いてくれる使者なのである。

ストルニィの燕はその後の第２作や第３作にも登場し、第１作と同様に燕に自分を重ねている[30]。ストルニィにとって、燕は自分自身の理想の姿を表し、夢を託して理想の境地へと導いてくれる対象であったと考えられる。

３．燕がいる春

ストルニィの詩的世界には、燕と共に春の場面を描いたものが目立つ。例えば、第１作の *La inquietud del rosal* に収められた No se había movido...[31]では、子どもが死を理解していくという内容であるが、死と対照的に春が明るく描かれ、あらゆる生命が誕生する春という季節を際立たせている。ストルニィにとって、燕のみならず、春そのものが死と再生という相反するものを描く格好のモチーフであったと考えられる。春は自然界では再生を意味する。ストルニィにとっても、春は死から生への移行を示し、人生の再出発を象徴しているのである。ストルニィが、死は命の終わりではなく、もう一度生まれ変わるために必要な出来事と考えていたからである。喪に服した黒い翼の燕は、再生の使者としてストルニィにとって重要なモチーフであった。自然界が春に再生をはかると同様、自分の人生の再生を春に願う気持ちは、夢や理想となって、ストルニィが春という季節を描くたびに半ば必然的に作品に投影されることになる。

しかしながら、この春に向けられた期待は裏切られ、諦めだけが残る。しかし、それは絶望する嘆きではなく、徐々に静かな諦めへと変化していく。それが第４作 *Languidez* に収められた Han venido...に顕著なのである。この作品では家族との再会を喜び、静かに思い出話に耽る穏やかな１日が描かれ、久しぶりに集まった家族は、春の訪れを告げる燕の群れに象徴されていると読める。しかし、ここには第１作から第３作に比べ、過ぎ行く燕の群れに対して

[29] *Loc. cit.*
[30] 例えば、*El dulce daño*（1917）の Tentación や Bajo tus miradas、*Irremediablemente*（1918）の Miedo などである。
[31] Muschietti (1999): p. 79.

傍観者のような感覚、つまり叶わぬ夢や理想への諦めのような感覚が窺えないだろうか。この感覚は、花が咲き乱れる春の野で、自分の元に飛んでくるのを感激するように燕を見上げているのではなく、部屋の中から窓越しに春空を眺めていることや、「私」自らではなく、妹が“Las golondrinas pasan...”[32]と言ったことからも読み取ることができる。

この変化は、「1. Han venido...について」で指摘したように、「私」の唯一の言葉である“La vida es dulce. Todo mal acaba ...”にも見出すことができないだろうか。この台詞は妹が語る人生最初の夢に対して、「私」が自らの夢を重ねて発した言葉とも考えられよう。「人生は優しい。どんな悪いこともやがて終わりがくる...」と読み取ることもできるが、ピリオドで詩行を終えていない点を考えると、「人生は優しい。何事も失敗に終わり...」という解釈も成り立つのではないだろうか。ここには春に対する期待はまったくといっていいほど感じられない。この Han venido... が収められている *Languidez* の中に、妹について書かれた Mi hermana[33]がある。ここでは、15歳の妹が、幼虫が糸を吹いて蛹をつくるように、絹で蕾を、夢を紡いでいると描写している。そして、妹の人生は春であり、「私」の人生はもう夏である、とうたっている（“Mi hermana está tejiendo como un hábil gusano／Su capullo de seda: su capullo es un sueño.／Ella con hilo de oro teje el copo sedeño:／Primavera es su vida. Yo ya soy el verano.”[34]）。蕾と夢は同義で、蕾が開く春は夢が叶う人生の時期を意味している。「私」にとってはその春は過ぎてしまったと言っているのだ。そして「私」は確かに全てを知っているが、彼女は天で過ごしているかのように何も知らないから、彼女の魂に慈悲があることを願っている（“¡Piedad para su alma! Yo lo sé todo, es cierto,／Pero ella es como el cielo: ella no sabe nada.”[35]）。人生を知らないからこそ夢を抱ける、と人生に諦めを覚える「私」が読み取れる。ストルニィが文壇に少ない女性であっ

---

32 *Ibid.*, pp. 236－237.
33 *Ibid.*, pp. 217－219.
34 *Loc. cit.*
35 *Loc. cit.*

たことや未婚の母であったことから、彼女の生き方は当時の社会に快くは受け入れられなかった。この点を考慮すると、ストルニィにとって人生が優しく味方してくれたとは言い難いとも思える。人生はうまくいかないという認識を持ちつつも、どんな悪いことにも終わりがくるという詩人の、人生を知り尽くした大人の女性の視線が、小さな少女に注がれて発せられた言葉が“La vida es dulce. Todo mal acaba ...”であると解釈できるだろう。第4作 *Languide z* には、春や再生への期待ではなく、夢を持ちつつも、それが叶わない現実を受け入れようとしている詩人の姿勢を読み取ることも可能である。

第5作 *Ocre*（1925）では、ソネット Versos a la tristeza de Buenos Aires[36]に「暖かい春の夢 los tibios sueños primaverales」という語彙が現れる。この作品の第1節でストルニィは詩人として生きたブエノスアイレス市がそれも悲しいまでに直線的に引かれたアスファルトの道路や空を覆い尽くすようなビル街として、冷たさと窮屈感を持って描写され、この街が「私」の暖かな春の夢を消したとして、夢の終わりを告げている（“Tristes calles derechas, agrisadas e iguales,／Por donde asoma, a veces, un pedazo de cielo,／Sus fachadas oscuras y el asfalto del suelo／Me apagaron los tibios sueños primaverales.”[37]）。それを裏付けるかのように、この詩の季節は秋である。さらに第2節の終わりでは、ストルニィは自分に声をかけられることを拒み、誰にも何にも応えないという決意を表明している（“－¡Alfonsina! － No llames. Ya no respondo a nada.”[38]）。ブエノスアイレス市に生きる Alfonsina に対する自らの拒絶である。自分を変えようという再生に対する期待ではなく、夢が叶わなかったという失望感に満ちている。第3作までに燕や春のイメージに重ねて描かれた夢を追う「私」は、第4作で現実を受け入れて夢を追うことに消極的になった自分を傍観者的立場で語り、この第5作では「私」の夢を実現することに対して悲観的な感情を直接的にぶつけている。

この *Ocre* に収められている詩には、自分の理想でもあった燕が

---

36 *Ibid.*, p. 292.
37 *Loc. cit.*
38 *Loc. cit.*

どこにも登場しない。そこには、夢を追う「私」はいない。なぜか。ソネット El engaño の最後で、ストルニィは自分を捨てようとしている男性に対し、“No eres tú el que me engaña, quien me engaña es mi sueño.”[39]と言う。ストルニィは、自分の人生がうまくいかない理由は、男に裏切られたからではなく、自分自身の夢に裏切られたからだと言い切ったのである。ここに、恋愛詩が多いとされる詩人が、自らの人生を直視しようと苦悩する姿が浮かび上がる。

4．燕がいない春

燕と春をキーワードにストルニィの作品を追っていくと、興味深いことがわかる。第1作 *La inquietud del rosal*（1916）には、燕が登場する作品は5篇あり、春をテーマにした作品は 10 篇収められている。第2作 *El dulce daño*（1918）には、春は 11 篇収められているが、燕は1篇と極端に減り、その代わりに蝶や蜜蜂が使われている。蝶や蜜蜂が登場する詩は 10 篇に及ぶ。第3作 *Irremediablemente*（1919）では燕が3篇に増え、春は 10 篇となっている。しかし、ストルニィの第1期の最後の作品といわれる第4作 *Languidez*（1920）では、燕が1篇になり、春は約半分の6篇に減って、春を描写した作品が少なくなっている。転換期の作品と評価される第5作 *Ocre*（1925）に至っては、燕は登場せず、春は6篇にとどまり、詩集のタイトルが示す黄土色の秋が目立つようになる。第2期となる第6作 *Mundo de siete pozos*（1935）では、燕のモチーフが復活することはなく、春のモチーフもわずか1篇となっている。第7作 *Mascarilla y trébol*（1938）では、燕が登場する「春の寓話」というタイトルの詩1篇が収められているのみである。

このように燕や春というモチーフが、Han venido...が収められた第4作 *Languidez* を境に影を潜め始めると同時に、この変化は詩形にも表れる。第4作までは自由な形式で描かれていたが、第5作や第7作ではソネット形式、第6作では短い詩行が何行にも渡る細長い形というように、詩集により詩形が統一されている。ストルニィ自身も、第4作 *Languidez* においてその詩集をもってこれまでの様

[39] *Ibid.*, p. 291.

式を捨てる決意を表明している。何故ならば、「私の魂が言わねばならなかったことを言い尽くしたので、主観的な詩の終わりを迎える」[40]ことにしたからであった。したがって、Han venido...が収められた第4作は、従来言われてきたようにロマン主義的な最後の作品ではなく、詩人の内的な変化にもとづいて本人が意図的に作品の転換をはかった作品として位置づけるべきなのである。

第4作において、ストルニィは夢に対して諦め始めていた。第5作 *Ocre* においてその夢に裏切られたと言い切った以上、その後の作品でさらなる夢を求めることはしていない。同時に、それまで作品に織り込んでいた詩人の個人的体験を想起させる具体的な描写も薄れていく。つまり、第4作でみられた夢への諦めが第5作で現実のものとなったのである。第6作と第7作では、自分の理想の化身であった燕は殆ど登場せず、代わりに燕と限定されない鳥が登場するようになる。ストルニィの最後の詩集 *Mascarilla y trébol* の中の Alegoría de la primavera[41]では、自然界の燕という動物と花という植物が、容器を表す pomo や箱を表す caja など閉じ込められているイメージを作り出す一方で、これらの生物に使われている動詞は apretar「締め付ける」と desatar「解き放つ」という反対の意味を表す動詞である（“Se hacen trompos los árboles y zumban,／y la piedra cojín y canto el agua;／y aprieta el pomo de las golondrinas／y desata las cajas de las flores.” [42]）。ストルニィは何を言わんとしているのだろうか。明らかにそれまでのロマン主義的な表現方法とは異なっており、もはや作品に春への期待や人生の再生、夢や理想を読み取るのは難しい。

おわりに

本稿においては、アルフォンシーナ・ストルニィの作品に見られるロマン主義的な特徴が、詩人の内的感情を適確に表現する方法として詩人自らが求めた表現方法であったことを、燕のモチーフを中心に考察した。ストルニィは、燕を春の同義語ととらえ、期待、死

40 *Ibid.*, p. 213.
41 *Ibid.*, p. 420.
42 *Loc. cit.*

と再生、夢と理想など複数の意味を加えた。そして、燕を通して自らの人生や夢を詩に織り込んだことを明らかにした。

燕は、自らを模索するストルニィの姿である。彼女の作品の中で、燕のモチーフが変化していったのも、詩人の生き方に悩みや葛藤があったからである。彼女に特有なロマン主義は、詩人自らの経験に根ざしているものであると言える。Pérez Blancoは、ストルニィの最も重要なロマン主義的な特徴として、「yo（私）」の称揚を挙げ、恋愛詩が多く、内容が悲観的であるとしたが[43]、燕のモチーフを中心に分析した結果、「私」を直視し、必ずしも恋愛に限られることのない人生の夢を追い、次第にその夢を諦めていった詩人の姿が浮き彫りになった。

ストルニィの第1作から第4作にかけては、理想や夢の世界が描かれ、それは死から復活する生命の再生を象徴する春の世界であった。この世界は詩人にとっての夢であり、現実逃避ともとらえることができ、その意味では確かにロマン主義的な精神が窺える。しかし、詩人は燕が春の空を自由に往来する姿や群れて渡りをする姿を、「私」の叶わぬ夢や理想、そして孤独と対比させている。ロマン主義的な要素を取り込んだ詩というよりは、ストルニィの素直な個人的な感情表現であろう。ストルニィが燕を通して、相反する感情を同時に表現するという独自のモチーフを試みた点にこそ、評価されるべき点ではないだろうか。

また、ストルニィの作品を、燕をモチーフに分析していくと、従来の作品区分では不都合が生じてきた。第1期は、燕や春に死と再生のイメージを吹き込み、期待に満ちた作品が多い時期と考えられる。彼女の転換期は、第5作ではなく、燕や春に対して傍観者的な態度を示して夢への諦めが描かれた第4作ととらえるべきではないだろうか。そして、第5作はロマン主義的感情へ距離を置いたといえる。第6作および第7作については考察が不十分であるが、ロマン主義的な表現方法は限界に至り、もはやその原型をとどめていないと考えられる。

---

[43] Pérez Blanco (1975): pp. 367－368.

参考文献

Astrada de Terzaga, Etelvina (1967): "Figura y significación de Alfonsina Storni", *Cuadernos Hispanoamericanos*, Vol. 211, pp. 127－144.

Armani, Horacio (1981): *Antología esencial de poesía argentina (1900－1980)*, Buenos Aires, Aguilar.

Darío, Rubén (1968): *Azul*, Madrid, Espasa－Calpe.

De Miguel, María Esther (1998): *Mujeres argentinas: El lado femenino de nuestra historia*, Buenos Aires, Alfaguara.

García de Celis, Eva M (1998): "Figuras de mujer en la poesía hispánica fin de siglo", *Cuadernos CANELA*, Vol. X, pp. 41－55.

García Montero, Luis (2001): *Gigante y extraño, las rimas de Gustavo Adolfo Bécquer*, Barcelona, Tusquets.

Gatell, Angelina (1964): "Delmira Agustini y Alfonsina Storni: Dos destinos trágicos", *Cuadernos Hispanoamericanos*, Vol. 174, pp. 583－594.

Gociol, Judith (1998): *Alfonsina Storni con－textos*, Buenos Aires, Ediciones Biblioteca Nacional.

Gómez Paz, Julieta (1992): *Leyendo a Alfonsina Storni*, Buenos Aires, Vinciguerra.

González Echeverría, Roberto and Pupo – Walker, Enrique (1996) : *The Cambridge History of Latin American Literature*, III vols. : The Twentieth Century, New York, Cambridge University Press.

Kirkpatrick, Gwen (1989): "The Journalism of Alfonsina Storni", *A New Approach to Women's History in Argentina*, Los Angeles, Berkeley, University of California Press, pp. 105－129.

Martínez Tolentino, Jaime (1997): *La crítica literaria sobre Alfonsina Storni: (1945－1980)*, Kassel, Edition Reichenberger.

Muschietti, Delfina (1999): *Alfonsina Storni, obras, poesía,* II tomos, Buenos Aires, Losada.

Nalé Roxlo, Conrado, Mármol, Mabel (1966): *Genio y figura de Alfonsina Storni*, Buenos Aires, Editorial universitaria de Buenos Aires.

Pérez Blanco, Lucrecio (1975): *La poesía de Alfonsina Storni,* Madrid, Villena.

Rosenbaum Sidonia, Carmen (1945): "Alfonsina Storni", *Modern Woman Poets of Spanish America,* New York, Hispanic Institute in the United States.

Stifel Ayala, Marta (1999): "Alfonsina Storni: La dramaturga y sus críticos", *Review of Latin American Studies*, Vol. 4, No. 2, Rogelio Reyes Editor, pp. 291－312.

田村さと子 (1994)『世界現代詩文庫(7)ラテンアメリカ詩集』土曜美術社。

中村多文子 (2003)「アルフォンシーナ・ストルニィ(1892－1938)－アルゼンチン女流詩人の人生と作品群についての一考察－」『REHK 京都外国語大学イスパニア語学科修士会』第 11 号 pp. 61－74。

ヨーロッパ世界[1]による他者表象に関する一考察
—大航海時代における巨人族表象について—

長尾直洋

はじめに

15 世紀半ばのポルトガルによる西アフリカ沿岸探検航海は、ヨーロッパ諸勢力の海外への進出の嚆矢となった。その進出は、18 世紀後半の 3 回に渡って行われたキャプテン・クック率いる太平洋探査航海によって、一応の終止符が打たれる。大航海時代と呼ばれたこの時代において、航海・植民事業に携わったヨーロッパの人々はこれまで知ることのなかった様々な事物と遭遇することになった。特に、その初期にアメリカ大陸の先住民と対峙したヨーロッパ人たちは、中世までに培われた他者観を踏み台として新たな他者である先住民を表象しつつ、先住民とその居住地を征服していった。先天的奴隷[2]や食人種[3]など、大航海時代初期のアメリカ大陸先住民に関する種々の他者表象は、トドロフによれば「他者を同化し、外的他者性を消滅させる」試みの端緒であったとされる[4]。また、グリーンブラットはその著『驚異と占有』にて、先住民に対する「驚異」を中心とした他者表象が先住民及びその土地を「占有」せしめたことを明らかにしている[5]。

---

1 グリーンブラットは「ヨーロッパの模倣的資本は、たとえ多様で内部的に競合していようとも、容易に国と信条の境界を越えて」しまうとしている（グリーンブラット　1994：p.13）。大航海時代に発展した印刷技術に基づく情報流通量の増加は、国家・信条の垣根を越えてある程度の情報をヨーロッパ諸地域内にて共有させることになったと考えられる。したがって本稿では、大航海時代に航海関連事業へと参加したヨーロッパ諸地域をヨーロッパ世界と表記し、先住民を表象する主体として用いていく。

2 アメリカ大陸先住民に対する先天的奴隷説の適用に関しては、ルイス・ハンケ『アリストテレスとアメリカ・インディアン』第五章を参照のこと。

3 先住民に対する食人種表象を問題とした論考は枚挙に暇がない。例えば、トドロフは「航海家と原住民」と題されたその論考で、アメリゴ・ヴェスプッチの記録における食人種表象がその後の南米先住民表象に多大な影響を与えたことを論じている。

4 トドロフ『他者の記号学』p.344.

5 グリーンブラットは「驚異」を中心とした表象について以下のように述べている。「この表象全体を用いて、中世末期およびルネサンス期の人々は、見慣れぬもの、異質なるもの、恐ろしいもの、望ましいもの、また嫌うべきものを理解し、それ故にそれらを占有、もしくは捨て去っていた」（グリーンブラット 前掲書：p.36）。

確かに、上記の他者表象は他者であった先住民をヨーロッパ世界の底辺へと組み込む際の原動力として働いた[6]。また、先住民に対する肯定的な表象も、結局はヨーロッパ世界へと加入するにふさわしい資格として解釈されていく[7]。しかしながら、先住民に関する他者表象の中には、未だにその表象がどのような機能を有していたのか論じ尽くされていないものが存在している。それは先住民を怪物人種とするものである。当時のアメリカ大陸には犬頭人や無頭人、巨人やアマゾン族など様々な怪物人種が存在すると信じられていた[8]。しかしながら、これらの怪物人種表象に触れた数少ない先駆的研究は、その表象がアメリカ大陸の視覚イメージを代表するものの一つであるという説明にとどまっている[9]。また、怪物人種表象を題材としてヨーロッパ世界による「新世界」（アメリカ大陸）表象の独占という従来の視点に一石を投じた論考でも、その表象が意味するものに関しては簡単な寓意的解釈のみしかなされていない[10]。

元来、怪物人種表象は先程触れた食人種表象と共に、大航海時代までにヨーロッパ世界が培ってきた他者へのまなざしを代表する表象の一つであった[11]。したがって、怪物人種表象には少なくとも食人種

---

[6] アレンズは『人喰いの神話－人類学とカニバリズム』にて、実際の食人の存在を認めるかどうかは別として食人種表象が如何にして支配のメカニズムとして働いたかについて示唆している（アレンズ　1982：p.188）。またヒュームは、それまで当然と考えられていた概念であるカリブ海先住民に対するカリベ／アラワク、食人種／友好種という二種族の分別が、ヨーロッパ世界によって恣意的に表象されたものでしかないということを初期の航海誌や後の文学作品に対するテクスト分析によって明らかにした（ヒューム　1995）。

[7] クリストーバル・コロンなどの報告にみられた一見先住民を擁護するような肯定的先住民表象は、キリスト教への帰依が可能か否かという次元での判断でしかない。例えばコロンは、先住民をキリスト教化するために品物を施した際に「彼らは信仰を持たず、偶像を礼拝することも知りませんでしたが、力と善は天にあると信じており」「彼らは鋭い知恵を持っていて」「何でも素晴らしくよく理解する」（コロン　1965：p.65）として、先住民の持つ優れた点とキリスト教受容能力とを関連付けている。

[8] 例えばコロンは、自身の四回の航海の中で尻尾のある人間やアマゾン族の存在について報告している（コロン　前掲書：pp.67及び70）。

[9] 落合一泰「「アメリカ」の発明－ヨーロッパにおけるその視覚的イメージをめぐって」『ラテンアメリカ研究年報』13，pp.1－38．また、落合は別の論考でヨーロッパ世界の他者認識に基づくアメリカ大陸の「占有」について論じており、そこでは否定的表象として怪物人種を扱っている（落合　1997）。

[10] Mason, Peter, *Deconstructing America: Representation of the Other.* p.110.

[11] 彌永信美『幻想の東洋－オリエンタリズムの系譜』p.44－48．なお、松本は植民地言説として読み解かれることの多いシェイクスピアの『テンペスト』

表象に対するものと同じ程度の注意が払われるべきであろう。そこには、従来見落とされていた当時のヨーロッパ世界による他者表象態度の一形態が潜んでいるのではないかと考えられる。

本稿では、上述の問題意識に基づき、大航海時代のアメリカ大陸先住民に対してヨーロッパ世界が投げ掛けた怪物人種表象の持つ重要性について論じていく。その際に対象として挙げるのは、南米の一部先住民に対する巨人族表象である。約3世紀に渡って続いた巨人族表象は、表象され続けた期間の長さもさることながら、南米の特定地域に住む先住民に投影されたという点において他の怪物人種表象とは一線を画している。しかしながら、実際にヨーロッパ人との接触が何度もあったにもかかわらず、巨人として表象されたこの事例に対して、その表象態度を問う研究はこれまでほとんどなかった[12]。頻度の差はあるが同様に先住民との接触を経たうえでなされた、両極的だが最終的には自世界の底辺へと組み込んでいく従来の他者表象態度[13]に対して、巨人族表象にはどのような他者表象態度が付与されていたのか。以下の各章では、中世までのヨーロッパ諸地域が持っていた東方怪物イメージについて言及した後、巨人族表象に関する報告（ヨーロッパ世界による南米先住民への巨人族表象の投げ掛け、すなわち巨人族情報の生成・更新過程）を検討すると共に、巨人族表象を示す図版（ヨーロッパ世界へと巨人族表象が伝えられる際の有力な手段、すなわち巨人族情報の流布・出力過程）に対する図像学的分析を交えつつ、南米先住民に対する巨人族表象の意味を探っていく。

1.「東方」怪物イメージと巨人族

まず始めに、大航海時代を迎えたヨーロッパ世界の抱いていた「東方」イメージについて概観していく。

におけるキャリバンの怪物表象を、中世までの他者観における怪物表象との対比にて論じている（松本　2005）。

[12] 従来の巨人族表象への注目は、その身長の推移に関するものがほとんどであった。例えば、種々の報告における巨人族身長の推移を示した表（Duviols 1985：p.70）が作成されている。また、Adamsは様々な巨人族報告について論じているが、その論考は各報告の信憑性を問うものでしかない（Adams 1962：pp.19－43）。

[13] この表象態度は、サイードのいうオリエンタリズム的なまなざしであり、彼の言葉を借りれば「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」（サイード　1987：p.4）に基づいた表象態度といえる。

大航海時代におけるヨーロッパ世界の最終到達目的地は「東方」であり、その地は当時、富や救いに満ちた楽園的な地域として想像されていた[14]。ヨーロッパの東方に位置するインドやアジアはもとより、コロンが「発見」した南米方面も当時は「東方」の一部として把握されていたのであるが、これら「東方」地域に対しては、希望的なイメージと共にもう一つ重要なイメージが持たれていた。それは「怪物が住む」というイメージであり、古来よりヨーロッパ世界は、自世界の外に怪物が存在するというイメージを持ち続けていたのであった。

そうした怪物イメージの中で、巨人族は確固たる存在感を示している。例えば、前398－397年以前にペルシアに滞在したクニドスのクテシアスは、インドのある地方に巨人が住むと報告している[15]。その後、プリニウスの『博物誌』(77年)やアレクサンドロス大王の遠征に関する物語集でも巨人の存在は踏襲されていき、広くヨーロッパ世界へと根付いていく。ヨーロッパ世界がキリスト教を抱いた後も、5世紀前葉に『神の国』を著しキリスト教と怪物との関係を論じた聖アウグスティヌスによって怪物人種の存在は肯定されている[16]。そして、巨人の存在は中世になっても健在であり、スペイン人征服者たちに多大な影響を与えたとされる騎士道物語や、当時ヨーロッパで最も影響力を持っていたとされる怪異の書、すなわちマンデヴィル卿による『東方旅行記』の中でもその存在が示されている[17]。なお、中世では、巨人は傲慢のシンボルとして一般の人々へと還元されていた[18]。

中世までにおける、「東方」巨人族イメージのヨーロッパ世界への流布は、大航海時代の南米の一部先住民に対する巨人族表象の下地を作ったといえる。それでは次に、実際にどのような巨人族表象が行われたのか、時代を追って事例を見ていく。

2．巨人族との遭遇と否定

南米における巨人族報告の端緒は、アロンソ・デ・オヘーダ指揮の

---

14 「東方」イメージについては、増田義郎『新世界のユートピア』第二章及び第三章；長尾直洋、「大航海時代の怪物イメージとその社会的意味」『イスパニア図書』6，pp.96－105を参照のこと。
15 彌永，前掲書，p.46.
16 ウィトカウアー『アレゴリーとシンボル』p.92.
17 マンデヴィル卿『東方旅行記』pp.167－168.
18 ル・ゴフ「西洋中世とインド洋－夢の領域」『中世の夢』p.50.

カリブ海沿岸航海（1499－1500 年）に参加したアメリゴ・ヴェスプッチによる航海記とされる[19]。現在のベネズエラ北方に位置するクラサオ島に上陸した一行は、浜辺に残っていた巨大な足跡から巨人族の存在を予見する。その後、同地の先住民女性と遭遇するのであるが、当時のヨーロッパ世界において知られていた大男よりも巨大である、との印象を述べている。最終的に女性たちよりさらに大きな先住民男性と鉢合わせた一行は、棍棒や弓矢を持った巨人族たちに恐れを抱いてその場から逃げ帰ってしまう[20]。

その後、巨人族の存在がヨーロッパ世界に広く知れ渡るきっかけとなったのは、ヴェスプッチによる遭遇から約 20 年後のマゼラン一行による世界周航であった。同航海の記録を残したイタリア人アントニオ・ピガフェッタは、その航海中に船団が二度巨人のような人々に遭遇したことを伝えている。南米大西洋岸を南下中、ラプラタ川付近で「カニバリ」といわれる食人種を発見した一行は、その中に背丈がほとんど巨人ほどもある男を見出した。そして、さらに南下した一行は越冬の為の寄港地にてさらに特徴的な巨人族と遭遇する。ヨーロッパ人の身長ではその腰の高さまでしか届かないほどの、まるで巨人のような大きさの先住民たちは、大きな顔とフェイスペインティング、白く染められた少ない髪の毛、動物の毛皮をたくみに縫いあわせた衣類や履物、太くて短い弓と「われわれのものと同様」の羽つきであまり長くない竹製の矢の束を持っており、また「胃が痛むと下剤をかけるかわりに、弓の矢を 2 パルモ（約 42 センチ）あるいはそれ以上も咽喉から奥へ呑みこむ」といった治療法を用いていたようである[21]。

同寄港地を出航したマガリャンイス一行が海峡を発見した後、同地方はヨーロッパ諸国による世界周航を含めた諸航海の寄港地としてしばしば用いられた。そして、16 世紀末にはオランダ船舶も来航しはじめている。その中でもシーボルト・デ・ウェールト一行による航

---

19 ヴェスプッチによる航海誌には、その著者性を含めて不明な点が多い。色摩力夫『アメリゴ・ヴェスプッチ－謎の航海者の軌跡』pp.4－9 には、その問題点が簡潔に示されている。

20 Vespucci, Amerigo, “Lettera di Amerigo Vespucci delle isole nuevamente trovate in quattro suoi viaggi”, *El Nuevo Mundo*, pp.242－245.

21 ピガフェッタ「マガリャンイス最初の世界一周航海」『大航海時代叢書　第Ⅰ期　第Ⅰ巻：航海の記録』pp502－505.

海は、巨人族との遭遇エピソードの図版化のために重要なものとなった。マガリャンイス海峡内のとある島へと上陸しようとした一行は、その地にて巨大な先住民（テウェルチェ族）と遭遇している。彼らは10～11ピエ（1ピエは約30センチメートル）もの大きさで、双方の衝突によって生じたオランダ人の死体の頭を棍棒で砕き、矢でもってわき腹から心臓までを刺す凶暴さを見せたようである[22]。

その後、時にはその存在に対する否定的意見が提出されつつも[23]、ヨーロッパ船の寄港の際に再確認され報告され続けた巨人族であったが、18世紀の半ばに入ると未だに巨人族の存在を認めたバイロン卿を最後にして、宣教師の長期滞在や「科学的」探査航海者たちによってその巨人性は否定されてしまう。巨人族との友好的遭遇を報告したバイロン[24]に対して、例えば1740年にイエズス会から派遣されたイギリス人宣教師トマス・フォークナーはヨーロッパ人として初のパタゴニア長期滞在を行い、1774年に出版した自伝にて巨人説を否定している[25]。また、フランス初の世界周航航海（1766－1769年）を指揮したルイ=アントワーヌ・ド・ブーガンヴィルは遠洋航海史上はじめて「本物」の科学者を同行させているが[26]、その航海の背後にはヨーロッパ世界を覆い始めていた科学的精神が見え隠れしており、彼が行った科学的実測によって南米巨人族の巨人性は完全に否定されることになった[27]。その航海は、パリのサロンが当時関心を示していた三つの科学的目標、すなわち「南の大陸」の発見、並外れた巨人とされる南米のパタゴン人の実像の解明、北極圏を縦断して大西洋と太平洋を繋ぐ「北の通路」の発見、を背負ったものであった[28]。そのため、これまでの多くの航海者たちが巨人族表象を行った先住民に対して彼は「科学的」実測を試み、その結果として先住民は、巨人というほど大きくはない、従来知られていた南米先住民の風俗を身に纏った

---

22 Duviols，前掲書，p.63.
23 例えば、イギリス初の世界周航を行ったフランシス・ドレイク一行は巨人族の存在を否定している（同書：p.63）。
24 同書，p.67.
25 藤井正夫『希望の大地パタゴニア』p.6.
26 山本淳一「解説1　ブーガンヴィルの生涯と『世界周航記』」『17･18世紀大旅行叢書第2巻』p.409.
27 ブーガンヴィル『17・18世紀大旅行叢書2：世界周航記』p.131.
28 山本，前掲書，p.401.

体格の良い人々として表象された。また、彼は従来秘密にされることの多かった航海関連情報に対して科学的情報の共有を意識した最初の航海者であり、その航海の情報は瞬く間にヨーロッパ中を巡っていき、巨人族表象はその幕を閉じることになった[29]。

3．巨人族報告と図像化

前項にて概観した南米の巨人族に関する諸報告の幾つかには、報告テクストを元に作成された、もしくは現地にて直接スケッチされた図像が残されている。以下では、先述の報告それぞれに対応する図像を見ることで大航海時代当時のヨーロッパ世界による他者表象について分析を行っていく。

まず、南米における巨人族表象の嚆矢と位置付けられるヴェスプッチ報告は、その報告が旧世界へと伝わってまもなくの1505年頃、ドイツにて無名作者によって挿絵が挿入される。

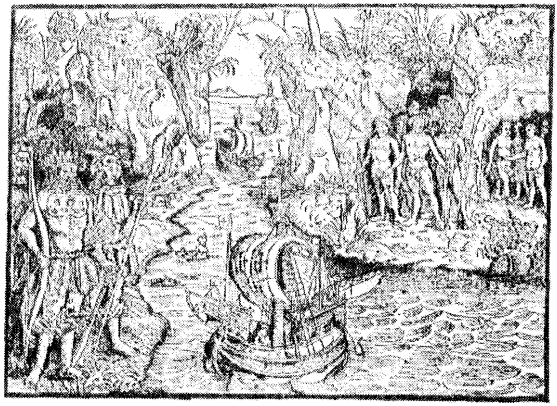


図１：ラプラタ川探検（1505年？、ニュルンベルグ）
[Sanz 1960：pp.430－431]

[29] ブーガンヴィル一行の数ヶ月前にパタゴニアへ赴いたイギリス船団によっても巨人性は否定されている。しかしながら、ブーガンヴィル報告は当時のヨーロッパ思想界と科学界の中心であるパリのサロンにおいて直ちに受け入れられた。間もなくディドロによって上梓された『ブーガンヴィル航海記補遺』などは、ブーガンヴィル報告が同時代人へと与えた影響の大きさを端的に示しているといえる。したがって本論では巨人族表象の否定の一因を彼に置くことにする。ブーガンヴィル航海の科学的志向と報告の影響については、山本，前掲書，pp.399－411を参照のこと。

図1ではヴェスプッチらの乗る船団が巨人たちの住む地方の河川へと侵入している。図の右上には、ヴェスプッチによる報告に忠実な「裸」の巨人族男性が「弓矢」「棍棒」を持って直立しており、さらに右には、同じく原報告に沿った形で男性より少し小さな巨人族女性が立っているのがみえる。

一方で、図版の左側には、右側に立つ巨人族に引けをとらない巨人たちが、当時知られていた南米先住民の代表的特徴の一つである「羽による王冠」や「羽飾りつき腰巻」を身につけている[30]。図版の題材となっている地名が「巨人の島」ではなく「ラプラタ川」であることも鑑みて、この図版にはヴェスプッチ報告における他の先住民描写と、巨人族描写にみられた諸要素の混合がみられるといえる。

また、この図版の構図を見ると、その中央には十字架が描かれた旗やマストを掲げて「ヨーロッパ＝文明」を表す船が配置され、その周縁の未開拓地には裸もしくは羽飾りを身につけ弓矢や棍棒を持った、中心の船と比較して異常な大きさの野蛮な巨人たちが置かれているのが判る。この図からは、衣服に身を包んだヨーロッパ人（文明、通常の大きさ）：裸に近い巨人族（野蛮、異常な大きさ）、その立ち位置としての、中央に配置された船（中心）：周囲の未開拓地（周縁）、またそれぞれの武器としての、大砲（文明）：弓矢もしくは棍棒（野蛮）といった対立項が見られ、そこには当時のヨーロッパ世界が南米に対して抱き始めていた自民族中心主義的な＜文明：野蛮＞、＜正常：異常＞、＜中心：周縁＞といったニュアンスが強く現れている[31]。

これらの対立項を駆使した他者表象によって表された南米巨人族は、次の主要な遭遇、すなわちマガリャンイス（マゼラン）一行による世界周航時（1519－1522 年）にも同様のイメージを見せている。この報告に関しては航海が行われてからほぼ半世紀の後に一つの象

[30] 多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界－コロンブスからクックまで－』p.39.

[31] 赤坂は、「周縁性とはある価値体系の内部における構造の揺らぎ」であり、「周縁は中心に奉仕する補完項としてのみ許容される」としている（赤坂 1992：p.291）。しかしながら、本稿では「周縁」をある価値体系の外部及び内部との境界を含めた範囲として規定する。因みに、図1における「周縁」は外部を示すと考えられる。なお、二項対立に注目した図版の分析に関してはアメリカ寓意図への落合の分析を参考にしている（落合　1993：pp.15－20）。

徴的な銅版画が作成されているので、その図版を検討していく。

15. DESCUBRIMIENTO DEL MAR DE MAGALLANES



図２：マガリャンイス海峡の発見（1594年、フランクフルト）
[Elliott 1992：p.179]

「探検家や征服家、そして移住者たちによって越えられた大西洋の向こうにあるエキゾティックな世界についての、初の写実的な視覚をヨーロッパの公衆にもたらした」[32]と評され、「新大陸」に関する様々な図版を残したドイツの銅版画家テオドール・ド・ブリの手になる図２は、マガリャンイス一行による海峡の発見を報じたものである。

その図に見られる構図は、先程紹介した図１と大変似通っている。まず、図の中心には甲冑に身を包んだマガリャンイスの乗る、四方に大砲を向けたヨーロッパ船が置かれ、彼を祝福するように天使がその側に配置されている。その一方で周囲には象を持ち上げるグリフォンや半人半魚の怪物、そして裸に近い先住民の男女の他に、ピガフェッタの記述を色濃く反映した原野に腰掛ける巨人族の男性が描かれている。この構図においても、図１と同様に＜中心：周縁＞の対立項を見ることが出来るであろう。なお、マガリャンイスの左側に位置するこの巨人は、身体に塗り物などは見られず、毛皮を身に纏ってはいないようであるが、裸に近いその姿は野蛮を想像させるに十分なものといえる。また、その手には弓矢を持っているが、その矢を飲み込んで

[32] Alexander, Michael, *Discovering the New World: Based on the Works of Theodore De Bry*, p.7.

いる仕草は彼らの生態の異常さや道具の使用法に関する逸脱を強調しているかのようである。さらに、この巨人の足元に注目すると、まるでヨーロッパ製であるかのような小奇麗な皮製の靴を履いているのが判る[33]。実際に彼らが履いていた履物というよりは元のマガリャンイス報告からの想像による産物と思われるこの靴の描写は、巨人族の描写がヨーロッパ人描き手のイメージによる加工を多分に受けていたことをよく示している。この図版に見られる巨人像は、立ち位置としての原野、その巨大さ、弓矢、裸に近い服装、そして矢を飲み込む奇習を持つといった野蛮で異常な属性を表象しており、船、大砲、甲冑（衣服）、天使（キリスト教）といった正常なヨーロッパ世界のカウンターパートとしての役割を担わされている。ここでは、巨人族は他の怪物たちと同様に異常なものを表象する存在として描かれており、その描写は図1と同様の意味を持っていると考えられる。以上の点から、南米探検初期におけるヨーロッパ世界は、南米巨人族を怪物的・異常・野蛮なイメージに基づいて表象していたといえる。

さて、マガリャンイスと彼らとの出会いが描かれた図2が制作されてから数年後、オランダのシーボルト・デ・ウェールト一行は巨人族との遭遇を果たしたのであるが、その航海誌が出版される際には巨人族との遭遇の場面が図版として挿入されている。

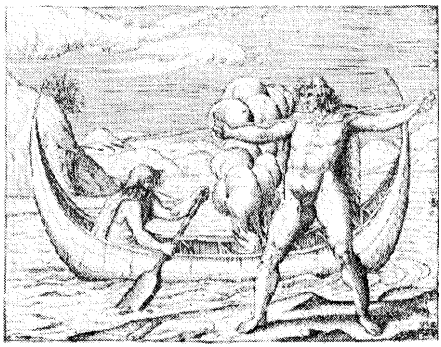


図3：シーボルト・デ・ウェールド一行の遭遇した巨人族
（1600年、ホラント）[Duviols 1985：p.61]

[33] 巨大な履物を履く先住民を見たマガリャンイスは、その地を patagón（大足）の地、パタゴニアと命名している。彼らの巨大な足については、津田正夫『火の国・パタゴニア－南半球の地の果て－』pp.16－19を参照のこと。

ホラント（オランダ）の無名作家の手になる図３を見ると、全裸に近い巨人族の男たちが佇んでいるのが判る。二人は共に毛皮のマントを身に付け、地面に立っている方は弓を引いているかのような格好で矢を持っている。またもう一方はカヌーを漕いでおり、カヌーの中には暖を取るための焚き火が描かれている[34]。これらの描写はおおむねウェールトの報告に沿ったものといえるが、奇習や象徴的な対立項を駆使していた先述の図版２と比べると、その姿からは異常さは幾分薄れているといえる。また、ウェールト報告におけるヨーロッパ人との敵対関係についても、図中でのヨーロッパ人の不在の為か、この図からはウェールト報告にあった凶暴性は見出せず、むしろその巨大さと身体的優美さが際立っている。

このように描かれた巨人族であるが、このエピソード自体がヨーロッパ世界に流布する際に最も影響を与えたのは図３を元に描いたド・ブリによる図版であった。

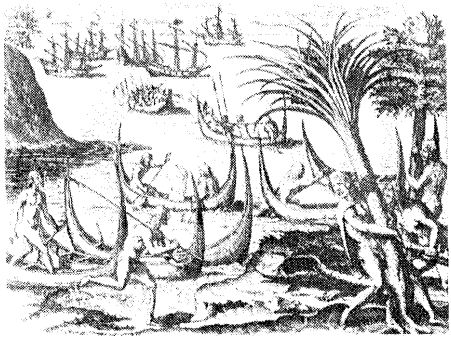


図４：マガリャンイス海峡の島にて、オランダ人たちは如何にして巨大で恐ろしい人々と遭遇したか（1612年）[Elliott 1992 : p.308]

この図４では、ウェールト一行による巨人族との遭遇エピソードが図３よりも具体的に表されているのが判る。手前の右側には、地面に生えた木を引っこ抜いて棍棒代わりにしようとする巨人族がおり、海

[34] マガリャンイスによる同名の海峡通過の際、同地の先住民が火を絶やさず灯しているのが目撃されている。このエピソードから、同地は“Tierra del Fuego”（火の国）と呼ばれることになる（津田　前掲書：p.34）。

上のカヌーでは、巨人族が焚き火をしている。さらに沖合では接岸しようと目論むオランダ人がマスケット銃を放ち、それに対して巨人族はカヌーの上から矢を向けている。この図からは、ウェールト報告にはあって図3にはなかった巨人族の凶暴性があらわになっている。それでも、対立項として現れるのは船：カヌー、銃：矢、棍棒程度であり、同じくド・ブリの作品である図2よりは対立項による他者性が薄れたものとなっている。また、この図では巨人族女性について描かれてはいないが、別の図では巨人族男性に対応した先住民女性が描かれている[35]。その図の説明では、巨人族男性よりもやや装飾的ないでたちをし、二人の子供を抱えた先住民女性は火を用いたものは食べずにただ生の鳥のみを食すとされ、さらにその鳥を子供へ与えている。そこには、残酷性と野蛮性が強く表現されているといえる。以上から、当時の巨人族表象は異常性が薄れた代わりに、凶暴性・野蛮性が増していたといえるであろう。

その後、18 世紀後半のバイロン卿による世界周航に至るまで巨人族は描かれていく。



図5：子供に与える為にビスケットを受け取る巨人族女性（1767 年、ロンドン）[Duviols 1985：p.65]

35 図版には直接巨人族女性と記されているわけではないが、別の図では巨人族男性とペアで描かれているため、本稿では先述の巨人族女性に対応するものとして扱っている（Elliott 1982：307）。

バイロン率いる船団と巨人族との遭遇を示した図5を見ると、確かに、ヨーロッパ側の船員に比べて巨大な先住民が描かれている。しかしながら、そのいでたちは毛布に棒切れという粗野ではあるが、もはや奇妙さは強調されないものとなっている。さらに、先程確認したようにそれまで生のものを食物としていた彼らは、この図ではヨーロッパ側の船員が差し出すビスケット（加熱調理された食品）を受け取っており、ここでは文明（ヨーロッパ）に飼い慣らされる野蛮（巨人族先住民）という構図が展開されるとともに、その他者性の垣根もかなり緩やかになっている。このように、巨人族に対して初期の段階では付与されていたその怪物性は徐々に薄れていき、その末期の描写においてはただその巨人性のみが他者性を僅かに示すのみであった。

そして、初の「本物」の科学者を同船したルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィル率いる一行がバイロンの僅か2年後にパタゴニアを訪れると、それまで語り継がれてきたパタゴニア巨人族の巨人性は完全に否定されてしまう。前章で紹介したとおり、ブーガンヴィルが目にしたのは、巨人というほど大きくはない、従来知られていた南米先住民の風俗を身に纏った体格の良い人々であった。

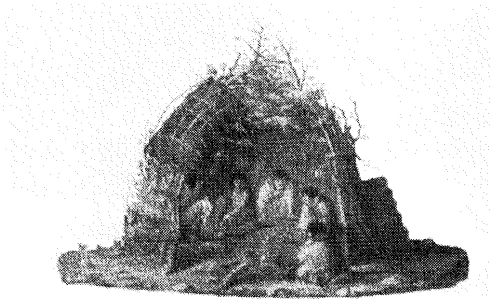


図6：ティエラ・デル・フエゴ島先住民（1769年、ロンドン）
[多木 1991：p.176]

その後、同地へ赴いたジェームズ・クック一行も同様に先住民の巨人性を否定している。同行者によるスケッチの中で、先住民は巨人性を失っている上に体格の良さも認められず、簡素な住居にて身を屈めている貧相な存在として描かれることになった。

4．巨人族表象に見る他者表象過程とヨーロッパ世界との関連

ヨーロッパ世界による、南米大陸先住民への巨人族表象の変遷をこれまで追ってきたが、その表象態度の変化には巨人族とその居住地への実利的及び思想的な関心が反映されているのではないかと考えられる。これまで見てきた表象過程を振り返ると、最初の発見期には従来のヨーロッパ世界による他者表象方法の常套手段、すなわち他者を怪物的存在として見做すという方法に沿った形での怪物的巨人族表象が行われており、巨人族に対しては「異常」で「野蛮」といった強力な他者性があてがわれた。しかしながら、時代を経ると共にその表象態度から異常さは消え、身体的優美さや野蛮な属性が際立っていく。＜中心：周縁＞の構図や「異常」な習慣の消失の一方で身体的な優美さを伴うことになった巨人族描写は、初期の描写と比較して他者性が薄まったといえるが、そこには未知の地の有用性への期待と恐れが多分に存在した初期と異なり、巨人族の存在がある程度知られていた上に、当時のヨーロッパ側のその地に対する評価が寄港地としての有用性のみに限定されていたことも関係しているのであろう。その後、凶暴性の喪失や加熱食品の受容によってさらに他者性を減じた巨人族表象は、ついにはヨーロッパ世界の「科学」に基づいたまなざしによって他者性そのものを否定される（外的他者性の消滅）。「科学」的ものさしによって人類全てがヨーロッパ世界を先頭とした一つの線上に配置されるにあたり、それまでヨーロッパ世界とは別次元の存在として扱われていた巨人族はその線の最後尾に配置されることになり（内延的他者[36]への移行）、巨人性を否定された単なるみすぼらしい先住民として描写された。さらに、本稿では取り扱わなかった19世紀末には、アルゼンチンのフリオ・ロカ将軍が指揮した「荒野の征服」[37]によって先住民は居住地を追われ、その人口は激減していった。

以上の過程から、大航海時代におけるヨーロッパ世界の他者表象の一過程が明らかとなった。すなわち、それは未知の対象に対する強力な他者性の付与、実利的・思想的関心の程度による他者性の肯定的・

---

[36] ここでいう「内延的他者」とは、国民国家といった一つの領域内における文明の発達度の高低などを指標とした、領域内中央による周辺のマイノリティへの他者化のことである（清水　2000：pp.76－80）。
[37] 藤井，前掲書，p.8.

否定的変化、利害の発生に伴う他者性の剥奪及び劣等性の付与である。

この過程を従来の植民地化における他者表象モデルと対比してみると、本稿にて分析を行った巨人族表象のプロセスは、同時代のイギリス文学作品から抽出された植民地における同化・排除のプロセス[38]である「ヨーロッパ化と非ヨーロッパ性の再確認、他者性の剥奪と強調、同化・吸収のポーズと最終的な排除」を、南米の一辺境の事例として実証的に示したものといえる。また、南米における従来の都市部インディオへの他者表象過程[39]に見られるような、ヨーロッパ世界への急激な同化及び排除と比較して、巨人族表象がなされていた間は対象先住民の同化及び排除が進まなかったのは注目に値する。このことから、各過程に付与された様々な属性を別にして、巨人という表象が大航海時代において他者性の根源的表現の一つとして用いられ、辺境と非占有という状態を示していたといえるであろう。

おわりに

本稿は、巨人族表象の生成及び重要な転換点に焦点を絞りつつ、ヨーロッパ世界による巨人族表象の生成、すなわちヨーロッパ世界への入力過程を踏まえた上でその表象態度の有力な出力過程であった各巨人族図版に対して考察を加えた、いわばヨーロッパ世界による巨人族表象過程の概観を示した試論である。その結果、巨人族表象過程の全体を通して、その表象が辺境及び非占有を示す表象として用いられていたことを明らかにした。

今後の研究では、本稿で扱った巨人族報告の諸テクストにおける他者表象態度、すなわちヨーロッパ世界が情報を入手した際の表象態度を詳しく追っていく。また、今回扱わなかった種々の巨人族報告についても検討していくことで、ヨーロッパ世界による南米先住民への他者表象の中で巨人族表象がいかなる経緯を経ていき、どのような表象態度を示していたのかを明らかにしていきたい。

---

[38] 正木恒夫『植民地幻想－イギリス文学と非ヨーロッパ』p.177.

[39] 清水，前掲書，pp.76－83．なお、清水は19世紀後半のアルゼンチン内における周辺領域を「内なる他者」「内なる自然」としているが、本稿にて扱う大航海時代におけるパタゴニア地方は、命名がなされてはいるが、少なくとも19世紀後半に入るまで植民政策とは無縁の地であり（藤井　前掲書：p.8）、その領域はヨーロッパ世界にとって外延的他者であったと考えられる。

参考文献

欧文文献

Adams, Percy G., *Travelers and Travel Liars, 1660－1800*, Los Angeles, University of California Press, 1962.

Alexander, Michael, *Discovering the New World: Based on the Works of Theodore De Bry*: Harper and Row, 1975.

Duviols, Jean－Paul, *L'amérique espagnole vue et rêvée. Les livres de Voyages de Christophe Colomb à Bouganville*: Promodis, 1985.

Elliott, John H., *AMÉRICA (1590－1634) de Teodoro De Bry*: Madrid, Ediciones Siruela, 1992.

Mason, Peter, *Deconstructing America: Representations of the Other*, London and New York, Routledge, 1990.

Sanz, Carlos, *Bibliotheca Americana Vetustissima － Ultimas Adiciones Volumen primero,* Libreria General Victoriano Suarez Preciados, Madrid, 1960.

Vespucci, Amerigo, "Lettera di Amerigo Vespucci delle isole nuevamente trovate in quattro suoi viaggi." Américo Vespucio, *El Nuevo Mundo* (textos preparados por Roberto Levillier), pp.197－267, Buenos Aires, 1951.

日本語文献

赤坂憲雄 『異人論序説』筑摩書房, 1992年.

アレンズ, W., 『人喰いの神話—人類学とカニバリズム』折島正司訳, 岩波書店, 1982年. (Arens, W., *The Man－eating Myth: Anthropology and Anthropophagy*, Oxford, 1979.)

彌永信美『幻想の東洋—オリエンタリズムの系譜』青土社, 1996年.

ウィトカウアー, R., 『アレゴリーとシンボル－図像の東西交渉史』大野芳材・西野嘉章訳, 平凡社, 1991年. (Wittkower, Rudolf, *Allegory and the Migration of Symbols*, London, 1977.)

落合一泰 「「アメリカ」の発明—ヨーロッパにおけるその視覚イメージをめぐって」『ラテンアメリカ研究年報』13, pp.1－38,

1993年.
落合一泰 「東方の驚異、ワイルド・マン、インディアン、グリーザー――近代西欧<民族人類学>によるアメリカ大陸の<占有>―」『講座文化人類学／第1巻・新たな人間の発見』pp.141－180, 船曳建夫編, 岩波書店, 1997年.
グリーンブラット, S., 『驚異と占有―新世界の驚き』荒木正純訳, みすず書房, 1994年. (Greenblatt, Stephen Jay, *Marvelous Possessions: The Wonder of the New World*, Oxford University Press, 1991.)
サイード, エドワード, 『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳, 平凡社, 1986年. (Said, Edward, *Orientalism*, Basic Books, New York, 1978.)
色摩力夫 『アメリゴ・ヴェスプッチ―謎の航海者の軌跡』中央公論社, 1993年.
清水透 「「他者化・自然化」をめぐって」『ラテンアメリカからの問いかけ―ラス・カサス、植民地支配からグローバリゼーションまで』pp.75－90, 西川長夫・原毅彦編, 人文書院, 2000年.
多木浩二 『ヨーロッパ人の描いた世界―コロンブスからクックまで―』岩波書店, 1991年.
津田正夫 『火の国・パタゴニア―南半球の地の果て―』中央公論社, 1964年.
トドロフ, ツヴェタン, 『他者の記号学―アメリカ大陸の征服』及川馥・大谷尚文・菊地良夫訳, 法政大学出版局, 1986年.
トドロフ, ツヴェタン, 「航海家と原住民」『ルネサンス人』pp.433－469, エウジェーニオ・ガレン編, 及川馥訳, 岩波書店, 1990年.
長尾直洋 「大航海時代の怪物イメージとその社会的意味」『イスパニア図書』6, pp.96－105, 行路社, 2003年.
ハンケ, ルイス, 『アリストテレスとアメリカ・インディアン』岩波文庫, 1974年.
ピガフェッタ, アントニオ, 「マガリャンイス最初の世界一周航海」『大航海時代叢書 第Ⅰ期 第Ⅰ巻：航海の記録』pp.477－

670, 長南実訳・増田義郎注, 岩波書店, 1965年.（Pigafetta, Antonio, *Relazione del primo viaggio intorno al mondo*, a cula di Camillo Manfroni, Milano, 1928.）

ヒューム, P., 『征服の修辞学―ヨーロッパとカリブ海先住民, 1492－1797年』岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳, 法政大学出版局, 1995年.（Hulme, Peter, *Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean, 1492－1797*, London and New York, Routledge, 1986/1992.）

ブーガンヴィル, ルイ=アントワーヌ・ド, 『17・18世紀大旅行叢書第2巻：世界周航記』, 山本淳一訳, 岩波書店, 1990年.（Bougainville, Louis－Antoine de, *Voyage autour du monde, par la frégate du Roi La Boudeuse, et la flûte L'Etoile; en 1766, 1767, 1768 & 1769,* Paris, 1771.）

藤井正夫 『希望の大地パタゴニア』丸善, 1996年.

正木恒夫『植民地幻想―イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房, 1995年.

増田義郎 『新世界のユートピア』研究社, 1971年.

松本一喜 「帝国の隠喩的世界―近代初期ヨーロッパにおける野蛮の表象―」『言語と文化』10, pp.95－116, 2004年.

マンデヴィル卿, ジョン, 『東方旅行記』大場正史訳, 平凡社, 1964年.（*Mandeville's Travels; Texts and Translations.* By Malcolm Letts, 2v. Hakluyt Society, 1953.）

山本淳一 「解説1 ブーガンヴィルの生涯と『世界周航記』」『17･18世紀大旅行叢書第2巻』pp.397－422, 岩波書店, 1990年.

ル・ゴフ, ジャック, 「西洋中世とインド洋―夢の領域」『中世の夢』pp.37－58, 池上俊一訳, 名古屋大学出版会, 1992年.（L'Occident medieval et l'ocean Indien: un horizon onirique, in: *Mediterraneo e Oceano Indiano*, Atti del VI Colloquio Internazionale di Storia Marittima, Firenze, 1970.）

TABLADA, José Juan, *Obras completas VIII. En el país del sol.*
(Edición crítica, prólogo y notas de Jorge Ruedas de la Serna),
UNAM, México, 2006, 294 pp.

太田　靖子

メキシコの詩人ホセ・フアン・タブラーダ(José Juan Tablada, 1871-1945)が来日した際に書いた日本に関するエッセイは、当時日本からメキシコに送付され、1900年7月から1901年12月にかけて『レビスタ・モデルナ』誌(*Revista Moderna*)に掲載されていた。最初のエッセイは、タブラーダがサンフランシスコで横浜行きの船を待っていた1900年5月末ごろに書いたものである。これらのエッセイが1冊の本としてまとめられたのは、1919年、ニューヨークでのことだったが、誤植が非常に多く、仕上がりはひどいものとなっている。

本書は、メキシコ国立自治大学（UNAM）教授である編者ホルヘ・ルエダ・デ・ラ・セルナが、1919年版『日の国にて』と『レビスタ・モデルナ』誌に掲載されたエッセイをつきあわせながら、1919年版の誤植をできるかぎり修正し、両者の異同も含め、彼が調べ上げたことを詳細に注に施したものである。600以上もの注をつける作業が長い年月を要したことは容易に想像できる。序文では、タブラーダの研究者でもあるルエダ・デ・ラ・セルナが、本書を解説しているが、そのなかで、タブラーダ来日に疑問を投げかけている。

29歳で来日したタブラーダだが、その目的は、『レビスタ・モデルナ』誌の特派員として、実際に自身の目で見た日本の芸術や文化に関して、同誌に書き送ることであった。滞在期間ははっきりしないが、7月初めから数ヶ月である。当時は、メキシコが日本との関係を急速に深めていく時代だった。1874年に、メキシコは、ディアス・コバルビアスを隊長とする金星観測隊を日本に送っていた。彼は2年後『メキシコ天体観測隊日本旅行記』を著わしている。この金星観測隊の来日が契機のひとつとなって、1888年メキシコは日本と修好通商条約を締結した。これはメキシコにとって初のアジア諸国との条約であり、日本にとっては初めての平等条約だった。1897年には榎本武揚の周旋による日本人の移民をメキシコは受け入れていた。このような状況のなかで、タブラーダのエッセイは、興味を持って読まれたことだろう。編者によると、エッセイのうちのいくつかは、再度他の雑誌に掲載された。

今回、2006年版の『日の国にて』が出版されることになった経緯には、タブラーダ作品が今日再評価されつつあるという背景がある。1970年にタブラーダの未亡人がUNAMに彼の遺稿や蒐集品の権利を譲渡して以来、タブラーダ作品出版のプロジェクトが始まり、本書は、タブラーダ全集の第8巻にあたる。CD-Rom版の彼の作品集（写真や絵を含む）もすでに3枚出され、UNAMによるタブラーダのホームページ(http://www.tablada.unam.mx/)は、日毎に内容を充実させている。

本書のなかで1919年版に所収されていたのは次のエッセイ25編である。「前書き」と「小パリ」はサンフランシスコで書かれ、「日本の暁」「日本に落ち着いて」「人力車」「薄闇のなかの詩」「支那の酒神祭」「人力車で巡る東京」「芝の寺院」「貴族の葬儀」「祭り」「茶の湯」「大衆演劇」「不夜城」「荘子の妻」「田園詩（蝉）」「秋の牧場（大草原）」「竹の栄光」は日本滞在中に書かれた。「西洋における日本」「余談」「衣装選び」「娘の目覚め」は来日前に、「日本の女性」「サン・フェリーペ・デ・ヘスス」「正月」は、帰国後に書かれ、『レビスタ・モデルナ』誌以外の雑誌にも掲載されていたものである。「支那の酒神祭り」と「荘子の妻」は横浜の中華街で題材を拾っている。

エッセイは2つのタイプに分けられる。1） 日本に関する情報を盛り込みながら、滞在中における体験や印象について描かれているもの、2）日本や日本のものに題材を求め、文学作品のように仕立て上げたもの。ルエダ・デ・ラ・セルナは後者を「作り事」("invención")と呼んでいる。彼がそのように呼ぶ理由は、タブラーダの来日に確たる証拠がなく、疑問を抱いているからである。

ルエダ・デ・ラ・セルナは、本書の「この版に関して」において、タブラーダがピエール・ロチ、エドモン・ド・ゴンクール、フェリックス・レガメ、ラフカディオ・ハーン、ジュディト・ゴーチエ、バジル・ホール・チェンバレンなどを参考にして、日本に関するエッセイを書いたとしている。特に、イギリス人チェンバレンの『日本旅行案内』と『日本語口語』の2冊を本書の種本として挙げている。確かに、タブラーダがエッセイ中に述べている多くの項目がチェンバレンの書物にもすでに述べられている。しかし、明治期に来日した多くの外国人たちが、チェンバレンの『日本旅行案内』を手にし、なかにはこの書物をもとに日本についての新たな著書を著わした者もいるため、タブラーダが『日の国にて』を執筆の際、上記の2冊を参照していても何の不思議もない。

「貴族の葬儀」や「大衆演劇」は日本に滞在し、それらを目撃してい

ないと書けないエッセイである。前者ではタブラーダは、黒田清隆の葬儀に参列してその葬列や葬儀の模様を克明に描き出した。後者では、歌舞伎を観劇したタブラーダが劇場内の様子、歌舞伎の演目の内容などに関して、臨場感たっぷりに、かつ微に入り細を穿つように描写している。タブラーダが当時のメキシコ人に伝えようとした明治時代の伝統・文化を、今回の出版を機に、彼の筆をとおして、日本人のわれわれが知ることになるのである。

タブラーダの印象記が同時代に書かれた他の日本見聞録と異なる点は、彼の文章が詩的である点である。例えば、タブラーダは、「人力車」では人力車に語りかける。「お前は燕のように黒く梟のように滑る。そして、時折、私がお前に乗る時、お前は、速くしなやかに飛び跳ねる。ダチョウの背にふんわりと乗っているようだ。…」。また、「竹の栄光」は散文詩そのものである。竹が、自分が歌集のなかに詠われていないことをタブラーダに嘆くという設定である。「…（詩人は）私を取巻くもの、長寿の松や紅葉やある日の梅の花を詠います。そして、私がこんなにも美しく、芳しく、活力に富み、万能であるにもかかわらず、誰も私のことは詠わないのです。富士山に登って鷲のような目で日本を眺めて見てください。どこにでも私が見えるでしょう。…」。詩的なタブラーダの文章によって、読者は、日本という国のイメージをさらに膨らませたに違いない。

この点に加え、すべてのエッセイに一貫していることは、タブラーダの日本への愛情、称賛、傾倒ぶりである。例えば、前述したエッセイ「人力車」では、人力車や人力夫を称えている。タブラーダ同様「人力車」を描いたロチの描写には、日本や日本人を蔑むような箇所が見られるのとは対照的である。「竹の栄光」では、タブラーダは、竹を「タケテンノー」と自ら命名し、竹の素晴らしさと有用性を述べるのである。

2006年版『日の国にて』には、タブラーダの文章を読む以外の醍醐味もある。それは、編者が、タブラーダ来日を疑問視しているため、編者の指摘する来日に関する矛盾点を注のなかでたどっていくことである。納得させられる場合もあれば、異論を唱えたくなる場合もある。だが、謎の多いタブラーダの来日を肯定、否定のいずれにせよ、証明する鍵は本書にあることは確かである。本書の出版を機に、さらに研究が進むことが期待される。

古家久世著

『ドン・キホーテへの誘い「ドン・キホーテ」のおいしい読み方』

行路社　2006年　179 pp.

三浦　知佐子

ミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』(1605/1615)といえばご存知の通り、全世界で聖書に次いで読まれている有名な小説である。

永田寛定・高橋正武訳(岩波文庫　1948- 1977)や会田由訳(筑摩書房1960/1962)、牛島信明訳『新訳ドン・キホーテ』(岩波書店 1999)に加え、荻内勝之訳『ドン・キホーテ』(新潮社 2005) が発表されるなど翻訳版がますます充実を見せているのと同様、『ドン・キホーテへの招待』(ハイメ・フェルナンデス著 柴田純子訳 西和書林 1985)、『ナボコフのドン・キホーテ講義』(ウラジーミル・ナボコフ著 行方昭夫・河島弘美訳 晶文社 1992)、『ドン・キホーテ讃歌』(川成洋ほか編 行路社 1997)、『セルバンテスの世界』(坂東省次・蔵本邦夫編 世界思想社 1997)、『ドン・キホーテの旅』(牛島信明著 中公新書 2002)、『「ドン・キホーテ」を読む』(京都外国語大学イスパニア語学科編 行路社 2005)、『ドン・キホーテ事典』(樋口正義ほか編 行路社2005)など、『ドン・キホーテ』を主題にした関連書も着実に出版されている。その中で、新たに刊行されたのがこの『ドン・キホーテへの誘(いざな)い「ドン・キホーテ」のおいしい読み方』である。

本書は全4章で構成されている。まず「第1章 『ドン・キホーテ』の構成」では、原作全体の概要がテーマ別に整理され、主人公ドン・キホーテの冒険を中心に、名作の骨格が浮き彫りにされている。続く「第2章 物語ダイジェスト」には、『ドン・キホーテ』全126章の梗概が、第1章でのテーマ別分類の項目に対応して、簡単明瞭にまとめられている。そして「第3章 ドン・キホーテとサンチョ」においては、主人公騎士のドン・キホーテと従者サンチョ・パンサの関係について書かれ、最後の「第4章 セルバンテスと『ドン・キホーテ』」ではセルバンテスの生い立ちや『ドン・キホーテ』が書かれた歴史的背景だけではなく、時代とともに移りゆく『ドン・キホーテ』の題名や、“原作者”こと語り手のシデ・ハメーテ・ベネンヘーリについても言及されている。

「第1章 第3節 前・後篇に費やした日数」は非常に地味ではあるが、作

品内の時間を確定するのは容易ではない作業である。「第 2 章 物語ダイジェスト」は本書の大きな魅力であろう。岩波文庫の牛島信明訳『前掲書』前・後篇全 6 巻を例に挙げると、計 2,541 頁を数える叙述量が見事に凝縮され、本書においては 90 頁ほどでその全容を読み取ることができる。しかも、台詞などへの脚色を抑制しているので理解しやすい。これなら短期間で読み通すことができ、『ドン・キホーテ』全 126 章の中身を的確に知ることが可能となるだろう。

評者が特に注目したいのは第 3 章である。物語の当初、騎士道小説の世界に浸りきったドン・キホーテは無欲で孤高を保ち、何事にも屈しなかった。対して従者のサンチョは無学で食欲、物欲が強かった。しかし物語が進むにつれてサンチョは賢くなっていき、ドン・キホーテは騎士道小説の世界から覚醒し始める。著者のこうした要約は、サルバドール・デ・マダリアーガが『ドン・キホーテの心理学』(牛島信明訳 晶文社 1992)で説く「ドン・キホーテのサンチョ化」、「サンチョのドン・キホーテ化」とも照応していると言ってよいだろう。この章ではドン・キホーテとサンチョの間柄を世間一般で言う“ただの”主従関係ではなく、著者は人間としてのより深い内面、理想と現実、無欲と貪欲、善と悪といった固有の二面性をこの 2 人が体現している様を探究している。

「第 4 章 第 4 節 セルバンテスの肖像画」では、著者は作家セルバンテス自らが『模範小説集』(1613)で自身の容姿について述べている一文を挙げ、それを基に描かれてきたと思われるセルバンテスの肖像画に関して 35 枚にも上る多種多様な図版を用いて論評を重ねている。レパントの海戦で左腕を負傷したことは確かなセルバンテスだが、その腕が不自由になったのかそれとも失ったのかにより描かれ方が異なり、時代や画家の解釈によって変化するセルバンテスの肖像画は、文学関係者のみならず興味深いものである。またこの節では、1910 年にハウレギ筆のセルバンテス像として発見され一時は本物と目されたものの、後に贋作であることが判明した絵が、現在もセルバンテスの肖像画として使用されている事例についても触れている。

特筆すべきは、本書が『ドン・キホーテ』と作者セルバンテスの単なる入門書などではなく、『ドン・キホーテ』が書かれた時代背景や主人公ドン・キホーテの深層心理、『ドン・キホーテ』が滑稽物として読まれるようになった経緯まで検証されていることであり、さらには「『ドン・キホーテ』の中には 60 数年の間に養われた作者の人柄から滲み出る不思議なユーモアとアイロ

ニーが織りこまれている。作者の理想を求める清廉潔白な心、人生に対する寛容と忍耐が読者の心を惹きつけることは確かである。」(「第 4 章」p.145)との評言に集約されるように、『ドン・キホーテ』がなぜこれほど読まれているのかというテーマにまで精察が展開されていることである。

読者はこの講読をとおして、『ドン・キホーテ』の物語、作者であるセルバンテス、そしてまた小説の真価がどこにあるのかについて、つまり概略だけではなく作品の本質論についてもより確実・簡潔に把握することができるだろう。『ドン・キホーテ』をこれから手に取る者にとっては本編に入りやすい導入書であり、知悉している者にとっても『ドン・キホーテ』の内容を再確認しながら読み込むことのできる、まさに古典の“おいしい読み方”を提供する良書の登場である。

REHK 投稿規定

(2004 年 11 月 11 日一部改定)

1. 本誌への投稿は京都イスパニア学研究会の会員に限る。ただし，本会が依頼した寄稿・講演の原稿等はこの限りではない。

2. 本会が依頼した場合を除き，執筆者は所定の印刷費を支払うものとする。印刷費の額については，その都度連絡する。

3. 原稿の種別は論文・研究ノート・書評・翻訳・資料とする。

4. 原稿は 9 月末までに＜規定 12＞の宛先に送付すること（期限厳守)。

5. エッセイ・回顧録等は記念号を除き本誌には掲載せず，会報に記載する。

6. 原稿の採否は，編集委員会が審査し決定する。

7. 提出された原稿について，編集委員会は意見を述べて修正を要請することがある。

8. 編集委員会が要請した場合を除き，提出後の原稿の書き足しや差し替えは認めない。

9. 製本は，提出原稿を使用する。従って，提出原稿は，下記の要領で清書プリントされた完成原稿でなければならない。

記

(1) 用紙
A4 版の用紙を用い，REHK 第 1 号～第 4 号に近い形で完成させる。製本の際には，A5 版に縮小されることを念頭に置くこと。(A5 版は A4 版を 70%縮小したもの)

(2) 余白
上下左右とも 25mm とする。

(3) 書き出し
第 1 行目：タイトル（太字，センタリング）
第 2 行目：空け
第 3 行目：氏名（右詰め）
第 4 行目：空け
第 5 行目：書き始め

(4) 註
文末註でも脚註でもよい。

(5) 原稿枚数
論文：和文で，34 字×33 行で 15 枚程度
欧文で，33 行で 18 枚程度
研究ノート：和文で，34 字×33 行で 10 枚程度
欧文で，33 行で 12 枚程度
書評：和文で，34 字×33 行で 3 枚程度
翻訳：和文で，34 字×33 行で 10 枚程度
資料：和文で，34 字×33 行で 10 枚程度
なお，枚数には，書き出し部分，本文，註，参考文献を含む。

(6) ページ番号
原稿の最下部に通し番号を付すること

(7) 文字のタイプとサイズ
和文の場合は，明朝体で 12 ポイント
欧文の場合は，Century で 12 ポイント

10. 前項の規定（1）～（7）に反する原稿は原則的に受理しない。

11. 原稿送付時には，以下のものを必ず揃えて提出すること
① 完成原稿をプリントアウトしたものを 3 部。
② 完成原稿の入っているフロッピーディスク（Windows の Microsoft Word に限る）を 1 枚。
③ 種別（<規定 3>）を明示したもの。
④ 和文の場合は，スペイン語タイトルおよびローマ字表記の氏名を明記したもの。

12. 完成原稿の送付先および REHK に関する問い合わせ先：

〒612 - 8577
京都市伏見区深草塚本町 67
龍谷大学文学部　安藤真次郎研究室
Tel: 075 - 645 - 8521（研究室直通）
E-mail: shinjiro@let.ryukoku.ac.jp

以上

編集後記

皆様のご協力により、REHK 第 14 号が刊行の運びとなりましたのでお届け致します。

京都イスパニア学研究会第 14 回大会（2005 年 12 月 4 日（日）、於キャンパスプラザ京都）は例年以上に多彩な内容で活況を呈しました。研究発表は池田玲子氏（ラテンアメリカ社会：ボリビアの先住民教育）、ベナビデス共子氏（方言学：コスタリカの語彙）、長尾直洋氏（歴史：大航海時代におけるスペイン人の他者認識）、敦賀公子氏（文化人類学：ナワ語文献）、太田靖子氏（文学：タブラーダと俳諧）の 5 名に行っていただきました。講演では、スペインの現代美術評論家で詩人の José Corredor Matheos 氏に“Pintura y Poesía”という演題で、そしてスペイン現代史の第一人者であられる碇順治先生（日西翻訳研究塾主宰）に「スペインの民主化とスアレスの業績を考える」という演題でお話いただきました。なお、碇先生の講演内容は本誌に掲載させていただきましたので、是非ご高覧ください。

最近、ある社会言語学者の著書を読んでいて、「10 年後のブラジルは 3 千万人のスペイン語第二言語話者人口を擁することになり、トリニダード・トバゴでは 15～20 年もすれば、国民のほとんどが英語とスペイン語のバイリンガルになるだろう」という意味のことが書かれた箇所が目に留まりました。イスパニア語圏人口の自然増に加え、非イスパニア語圏諸国の教育改正にともなう第二言語としてのスペイン語話者数増加という現象は確かに無視できないものがあります。また、今年に入って総人口が 3 億に達した米国では、スペイン語話者の拡大は今さら言うに及ばず、espanglish なる混成言語が市民権を得ようとしています。ボーダーレス化が進行する現在、気がつけば「イスパニア語圏」の定義がもはや自明のものではなくなっているといったところでしょうか。そう言えば、今年、冥王星が「惑星」から外され、理科の教科書の記述が変わるというニュースがありました。絶対不変の真理を追求するはずの自然科学でさえ、ある日突然「自明」が自明でなくなるわけですから、人文・社会科学分野ではなおさらのことなのでしょう。こうした社会情勢の変化を見守っていくことも我々イスパニスタの役割ではありますが、同時に新たな分野を開拓し、斬新なテーマを掘り起こす好機でもあると言えます。一昔前なら考えも及ばなかったテーマの論文が本誌に掲載される日も、そう遠くはないかもしれません。

（岡本信照）

REHK (Revsita de Estudios Hispánicos de Kioto)
２００６年１２月１０日　印刷
２００６年１２月１０日　発行

発　行　所　京都外国語大学イスパニア語学科
〒６１５－８５５８　京都市右京区西院笠目町６

発行責任者　岡　本　信　照
印　刷　所　都　印　刷
〒６００－８３１８　京都市下京区北小路新町西入る

R E H K

Revista de Estudios Hispánicos de Kioto

No. 14

Conferencia:

Política de Adolfo Suárez y la Transición Española
..... Junji IKARI (1)

Artículos:

Aproximación a la teoría de la educación de Alonso Ortiz
—Sus caracteres humanísticos—
..... Sayaka KATO (17)

Un aspecto del romanticismo en la poesía de Alfonsina Storni
—A través de la figura de la golondrina—
..... Tamiko NAKAMURA (33)

Una consideración sobre la representación del otro
por el mundo europeo—La representación de Gigantes
en la Gran Edad de la Navegación—
..... Naohiro NAGAO (49)

Reseñas:

TABLADA, José Juan: *Obras completas VIII. En el país del sol*
(Edición crítica, prólogo y notas de Jorge Ruedas de la Serna)
UNAM, México, 2006, 294 pp.
..... Seiko OTA (67)

FURUIE, Hisayo: Invitación a Don Quijote
—la lectura rica de "El Quijote"—,
Korosha, 2006, 179 pp. ..... Chisako MIURA (71)

2006
Asociación de Estudios Hispánicos de Kioto